

505

35

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



505-35

序

輓近、社會的變化の急激なるに従ひ、之れに適應する必要上から、社會に關する幾多の著述が、限りもなく公にせらるることは洵に喜ばしい現象であつて、これでも初めて吾々の生活は、能く現代に適應して、究極の優勝を期し得るのである。

と云ふのは、アリストートルも云つてゐるやうに、智識は力であり、而して力を有する者は何れの意味から言ふても、最後の勝利者たるべき筈だからであつて、若しも十九世紀を以つて物質力獲得の時代とすれば、二十世紀は正に精神力修養の時期でなければならぬ。

微々たる本書の如きが、現代の此の様な要求に應ずるために出たなど申すと

序

大正
11. 6. 27
内交

實は手前味噌の誦を免れないかも知れぬが、然し一寸の虫にも五分の靈あると
 の下世話の通り、縦へ外形は小さいながらも、本書には又本書だけの抱負と使
 命とが、賦課されてゐないでもないから、賢明なる讀者は單に其の外形の小な
 る故を以つて、復た其の表題の卑俗なるの故を以つて、直に其の抱負と使命と
 而して内容とを、等閑に附し去ることは決してしないであらうことを信ずる。

一九二二年五月

著者誌す

目次

一、序論.....(一)

 社會的出來事の類發——社會的理論の徹底化——社會的理論が
 遅々として進まなかつた理由——現今に於ける社會學の急激な
 發達——社會を知る方法

二、社會の意義.....(六)

 社會てう語の意味——これを本來の語義に解すべきか——社會
 學の中心題目——社會學の研究單位——社會は永續的たるを要
 するや——社會は心理的のもの——下等動物にも社會ありや！
 ——生活様式が社會的であつたり或は孤獨的であつたりする所以
 ——社會に關する諸家の定義

三、社會の性質.....(三)

 社會契約説の發達並に其の本質——社會契約説と社會改造——

變態的社會契約説の主張——社會有機説の發生理由——社會有機説の中心——思想——社會有機説の批評——社會契約説と社會有機説との折衷説即ち契約的有機説並に哲學的有機説——社會心理説は果して完全なものか——社會心理説の神髓——社會心理説の社會改造觀

四、社會の分類

一般的の社會と特殊の社會——社會の分類法——八種の社會

(六)

五、家族生活の變遷

家族の發生——家族生活の進化——母系制から父系制へ遷移した理由——現代病の一つである離婚の原因

(七)

六、國家の發達

國家の本質——社會と國家との異同——社會と國家とが並立する所以——國家の發展徑路——國家形成の主要要因

(八)

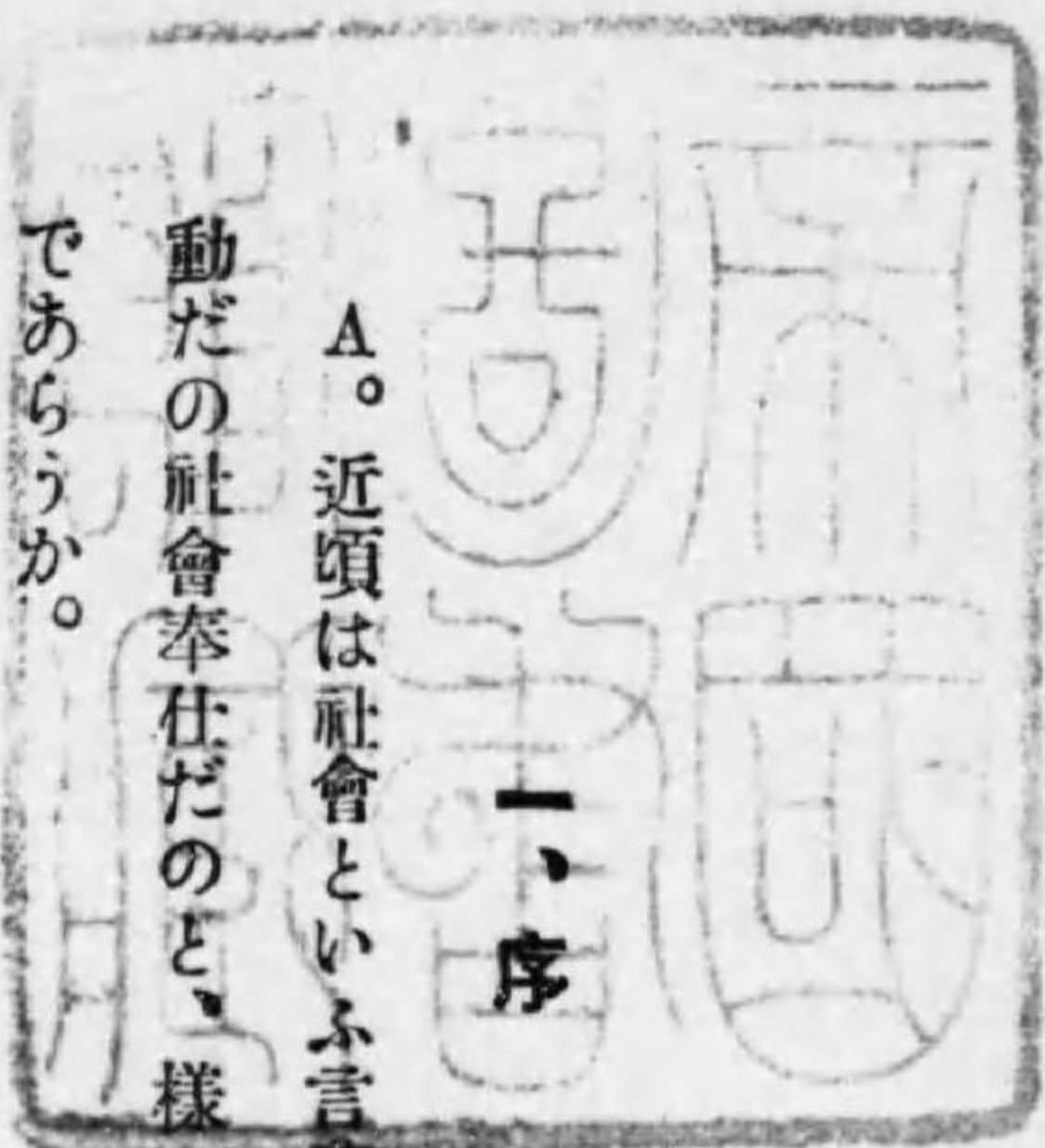
七、社會の目的

社會の目的——社會には果して目的なるものありや——個人の目的と社會の目的——個人の目的若くは理想が多様であるやうに、社會の其等も亦多様であるか——個人主義と社會主義との對立を論じて、現今多く喧傳せられてゐる社會改造策の缺陷を指示す——社會には究極目的とでも云ふやうなものはないのか。

(九)

目次畢

社會の話



一、序論

A。近頃は社會といふ言葉が矢鱈に流行り出し、いや社會問題だの社會改造だの、やれ社會運動だの社會奉仕だのと、様々な社會理論や社會事件が起るやうであるが、一體これは怎うした譯であらうか。

B。それは云ふまでもなく、近頃になつて種々と社會に病弊が発生し、且つ其れを人々が氣づくやうになつたからに外ならないであらう。即ち、世界の人口が繁殖して、人々の關係が密接となるに従ひ、出來事は彌々頻繁になり、且つ産業革命の結果貧富の懸隔が愈々酷しくなつたから生活に附隨する物質的並に精神的の幾多病弊が自然に發生し、斯くて此の難局を脱れよう、脱き出

でようとするのが、今日の爲體だからである。

A。して見ると、今後は尙ほ一層社會的事柄が頻繁に起り、従つて社會に關する理論も色々面倒になりはしまいかと思ふが如何？

B。それは勿論のこと、現今の社會的、政治的並に經濟的の傳統や制度にして變化しない限り、人々の生活が日に増して窮地に陥ることは智者を待つて後ち知るべきでない。

此の點に於てマルサスの言は確に知言であつて、一部の經濟學者が局部的に反證するやうな半面的の眞理は必ずしも全體としての社會的眞理ではないから、今日の如くにして推移する限り社會が進むに従ひ、其の弊弊は増大するにしても決して低減する氣遣ひはない。

果して然らば、今後に於ける社會的事件が日に益々深刻味を加へ、之れと同時に社會に關する理論も亦一層徹底的となるのは蓋し必至的の運命であらう。

A。人類學者並に地質學者等の言に依れば、人類の發生は過去少くとも二十五萬年以前から五十萬年も遡るとのことであるが、アリストートル初めオーグスト・コムトやチャールス・ダーキンや、そしてハーバート・スヘンサーや其他の幾多生物學者並に心理學者等に依り、人間性を以て

最初から社會的であるとされてゐる限り、人類と共に此の様に長い々々歴史を有する筈の社會に關する學問が、何故に爾餘の總ゆる現象に關する學問の著しく發達してゐる今日、尙ほ未だ完成するにさへ至らなかつたかと云ふことが吾々には怎うも腑に落ちない次第だが、其れは一體どうした譯であらうか。

B。それには別に深い仔細はないさ。一口に言ふて見れば、即ち社會に關する學問の成立すべき諸條件が、今日まで未だ具備されなかつたからだ。

此の様な例は生命に關する學問である生物學にもある。ちよつと素人眼で見ると、生命に關する學問が先づ發達して、其れから植物學や動物學と順次に發達すべき筈のやうに考へられるが、其れは全く考へ違ひだ。植物學や動物學やが充分に發達してから、然る後に一切の生物に共通する生命とか生活とかの學問が發達するのが順當である。

其の様に、社會に關する學問でも、縦へ社會生活は人類と共に古くして、且つ久遠な經驗を有するものであつても、先づ其れの様々な方面の學問たる倫理學、經濟學、政治學、法律學、人類學、比較宗教學、心理學並に生物學等の諸科學が發達し、さうして其等のそれらの法則が確立

した後でなければ、其れは到底發達するに由ないのである。

何となれば、社會に關する學問即ち社會學は、是等の特殊的な社會諸科學並に生物學等の原理を悉く攝取し、吟味し、且つ按排し、斯くて初めて其の成立を見るべきであるからで、社會學の創始者たるオーグスト・コムトも言つてゐるやうに、特に生物學の研究法が社會學の建設に寄與した點は洵に尠少でないから、従つて生物學の發達しない前に社會學が獨り能く發達し得る道理のないことは、固より當然のことであらう。

A。それで社會に關する學問が最後に發達した所以は漸く解つたが、其れは今日でも尙ほ不完全なものであるのか、一應伺つて置きたい。

B。社會に關する理論は、既に述べた社會諸科學並に心理學や生物學等の發達に由り、特に最近十年間に於て著しい發展を見たが、然し社會學は未だ以て完全に確立されたとは云はれない。

と云ふのは、今日尙未だ社會そのものの定義に關してすら、従つて又社會學の題目や範圍に關してすら、諸社會學者の間に見解の一致を見るに至らないからであつて、何れの學問でも多少其の傾きのあるのは免れないにしても、其れが現今の社會學のやうに甚しいものはない。

試みに現在發行されてゐる社會學といふ名の付いた本を繕いても見給へ、其等が社會を論究してゐる調子なら項目なら、殆ど十人十色の觀があるではないか。之れ明かに社會學が尙ほ未だ充分に確立するに至らないことを立證するものであるとは云つても、現代の社會學を要求する熱心は洵に驚くべきものがあると共に、之れを研究しようとする識者の熱誠も、亦ナカ／＼に熾烈なものがあるから、按ふに其の確立も決して遠いことではあるまい。現に有力な社會學者の間には漸次見解の一致を見ようとする曙光がほの見えてゐるのである。

A。成程お説の如く、僕も昨今雨後の筍の如うに出る社會學若くは社會學的何々てゝ表名を冠した本を可なり覗いては見たが、是れが同じ社會を研究してゐる本であるかと實は少々驚いたほどに、其の内容は殆ど全く別種に屬し、且つ偶々同種の項目があつても之れを別様に論じてゐる社會學者でない吾々素人には、其の所説の正邪と取捨とにさへ迷つた次第だから、主旨の解らぬのは固よりだ。それで社會とは一體どんなものであるか位でも、切めて現代人としては心得て置きたいと思ふが、何とか其の方法はあるまいか。

B。方法のないことはないさ。其れには先づ第一に社會の定義から知ることだ、さうして其の

進化を知り體制を知ることであるけれども、それがナカ／＼容易なことではないのだ。

社會とは一體どんなものかを知つて置きたいなど、君は雜作もなく言ふが、其れが實際容易な業ではないのだ。それが然う譯もなく解る位なら、何十年否な何百年かゝつて、學者が一生涯油汗を搾つて研究する必要はない筈だけれども、前でも云ふた通り、社會に關する定義すら、今日未だ以て諸社會學者の間に殆ど意見の一致する所がない有様さ。従つて社會に關する諸論究に於て、學者の見解が區々に分れてゐるのは固より云ふまでもなからう。

と云つたからとて、社會を以て必ずしも諒解し難いものとする譯では決してなく、其れに關する諸社會學者の見解も、大體に於て一致するものが多くなつてゐるから、以下項目を別ち、可能得る限り君の所謂社會とは一體どんなもの、*Qu' est-ce que la société?* かのホンの核心だけを論究することに努めよう。

二、社會の意義

A。社會の定義を知るに先だち、最初に社會と云ふ言葉の語義から承つて置きたいと思ふ。

B。いかにも其れは必要なことだ、社會は羅甸語では「ソシエタス」(Societas) 英語では「ソサイエティー」(Society) 佛蘭西語の「ソシエテー」(Société) 而して獨逸語の「ゲセルシヤフト」(Gesellschaft) 等に該當する言葉であつて、共に本來は「明輩」とか或は「仲間」などを意味し、後に今日のやうな意義に轉化して來たのである。

A。それなら、社會をド、コまでも其の本來の意味に解釋してさへ行けば、別に異見の起り様はなからうと思ふが如何。

B。そうすれば、一見いかにも異議の起りやうはないが、然し翻つて考へても見給へ、一體「朋輩」若くは「仲間」などいふものは何を意味するかと。日常吾々の用ゐてゐる「仲間」なるものの中には、或は少數の學友や遊び仲間や商賣仲間や多數の隣人や同郷人や同縣人や同國人や、或は之れを更に大きく云ふと、同一文化の民族や並に同胞としての人類全體をも、包括する場合があるであらう。

而して其の中には群集の如うな一時的關係の仲間もあれば、又は親戚とか親友などのやうに、永續的の仲間もあるであらうから、斯う考へて來ると、君の云ふ通り社會といふ語を其の本來の

意味に即して解釋した所で必ずしも然う見解の一致する譯はない筈ではあるまいか。

A。なるほど然う言はれて見ると、解らなくなるねえ。だが、此の様に意味の廣汎な「仲間」といふ名辭の中にも何か知ら中心的意思、換言すれば只今お述べになつた幾多仲間の間にも何等かの共通した内容とか或は觀念とでも云ふやうなものはないものであらうか。

B。そこだ、從來多くの社會學者が社會學の出發點として狙ふた所は實に其所だ。そして之れに最初氣づいたのは、現代社會學界の泰斗フランクリン・ヘンリー・ギツヂングス博士であつて、彼れは其の「社會學原理」並に「社會學綱要」の兩著に於て、同類意識 (Consciousness of kind) が其れであると提唱した。

が、後に到りて多くの學者の批判を受くるに及び、其の「歸納的社會學」並に「記述的及歴史的社會學」では、少しく旗色を變へて「刺激と反應」(Stimulus and response) を社會心意の起點となしてゐるやうである。

之れと相並んで、合意若くは意志の結合を以て社會學の研究單位と主張する學者も多くあつて、我國では遠藤隆吉博士なども此の部類に屬する如うであるが、予輩が他の場所でも言つてゐ

るやうに、是れは又餘りに社會の範圍を限定するものであるから、吾々は採らない。

何となれば既に意志の結合を以て社會とする以上、一社會内の諸々の意志は何れの點かに於て何時も結合してゐなければならぬ筈であるのに、必ずしも左様でない場合の多い上に、縦ひ近親間や親友間に於てさへ、折々は意志の乖離を見ることがあるからであるが、意志結合説に依れば少くとも此の期間には社會は成立しないのであらうか。斯くては社會を一個の純然たる契約體或は少くとも準契約體と見做すの外はない。

然るに意志結合説にして若しも血統や言語や習慣や制度や、並に其他の一般文化等の共通そのものまでをも、悉く意志の結合と見做すならば、然らば其の場合は、人々間の葛藤や且つ國際間の戰爭ですらも——人類學上に於ける人種一元説を肯定する限り——等しく社會の一現象であり、従つて社會學の論究圈内に落つる譯であるから、其の點に關しては予輩復た意志結合説に對し何等の抗議を挾む所はない。

が、但だ不審に堪えないことは、何が故に意志結合説は斯くの如き事柄までをも、敢て「意志結合」の中に包括させなければならぬ理由があるか、復た若し此の様な事柄までをも、悉く社

會てうものの中に包容させようと欲するならば、意志結合説は何が故に一刻も早く其の本陣を明け渡し、さうして更に一層景勝な地位に其の主張の優勢を據らしむることをしないかと云ふことである。

而して我國に於て意志結合説を特に強調してゐる支持者の一人は、遠藤博士であると思ふから左に氏の意志離反に關する所説を少し引用し、さうして寸評を試みて止むが、氏曰く――

凡そ意志離反は個人にとりては寧ろ例外にして、意志結合に比すれば其の場合極めて少なし、縦ひ個人に意志離反の行爲ありたりとせむも、是れ其の方面に於て然るのみ、他の方面に於ては依然として意志結合しつゝあるは常に見る所の現象なり、謀叛人は朝廷の意志には反對すれど、同く倫理習慣に遵由しつゝあるもの、此の點に於ては社會に意志結合しつゝあるなり、即ち何等か父祖の志を紹ぎ朋友の志に結合しつゝあるべきなり、故に謀叛なる意志離反は寧ろ其の一方面のみ、隱匿する者も社會の習慣に従ひ其の言語を用ひざること能はざるべし、此の方面に於ては又意志結合しつゝあるなり、云々。

と、以つて氏の意志結合説の一斑を知るに足るであらう。吾々は氏の所説に大體上の賛意を表す

るに吝かなるものでは決してないと共に、復た社會現象の重大な部分がギッチングス博士の合意 (Concerted volition) や スタッケンベルグ博士並に遠藤博士等の意志結合やによりて占有されてゐることを承認するに遲疑するものでも決してないが、然しながら社會の習慣に従つたり或は其の言語を用ひたりすることをも、等しく意志の結合と稱して妥當なものであらうか。

斯くの如きは用語の當不當の問題であるから、姑く差置くとするも、若し夫れ氏が意志結合の種類及び系統として、主權や國家や社會中樞や機能團體や社會心意や傳説團體や流行團體や交際團體や家族團體や、而して繼承團體やを一束に列擧してゐると共に、更に意志結合の標準として群衆や血縁團體や並に其他やを雜然配列してゐる點に至つては、少くとも氏の社會學的體系には、多く賛意を表する譯にはゆかないのを予は遺憾とするものである。……

A。未だ御説明の途中で、餘計な差出口をして甚だ恐入るが、念のため更に一應聞き正して置き度いのは、前で述べられた社會學の研究單位とやらは、既に一般の社會學者により承認されてゐるのであるか、若し承認されてゐるとすれば、一體それは何であるか。

B。各々の科學にはそれ／＼特有な研究單位がなければならぬ、例へば生物學が生物を研究し

人類學が人間の物理的諸關係を研究單位とする如うに、社會學も亦何等か一の研究單位を持たなければならぬとするのが、ギッチングス以來一部の社會學者の主張した所であつて、今でも尙ほ依然其の様な見解を支持してゐる學者——例へば米國カンサス大學の社會學教授フランク・ブラツクマ博士、並に同じくキスコンシン大學社會學教授ジョン・ルユキス・ギリン博士の如き——がないでもない。然るにエルウッド博士並に其他の人々は之れに反して、一科學必ずしも一つの研究單位を持たなければならぬ理由はないから、同時に幾多の研究單位を併用しても差支へはないとし、而してギッチングスが「同類意識」とか或は「刺戟と反應」とかを提唱し、復た遠藤博士が意志結合を力説し、且つタルドが「模倣」を高調して、一單位主張者等の孰れもが立論上多少の牽強と附會とを冒かさなければならなかつたに對し、複單位唱導者は又その何人もが立論上に多大の妥當と透徹とを加味してゐる特長がある。

蓋し宇宙は之れを大觀すれば一つの統一體に外ならないから、其の諸部分を分割して之れを一つの科學が專攻するのは單に分業のためであつて、本來自然界に斯くの如き劃たる限界はない。で、例へば生理學で研究しなければならぬ筈のものでも、場合に依りては心理學でも或は其

他の諸科學でも論及しなければ、共に論旨の徹底を期することは可能ぬ如うに、社會でも亦時とすると、心理學や倫理學や或は經濟學や人類學等の領分にも觸れなければ、決して人間社會の完全學問たることは可能ない。

此の點に於て一つの科學は、必ずしも一二の限定された研究單位に踰踏してゐなければならぬ理由は毫もない。けれども翻つて考ふれば、何れの科學にも或種の中心題目たるべきものは存する筈であつて、其れは上でも述べたやうに必ずしも一つ若くは二つと制限されるべき必要はないにしても、苟も其れが全然存しないものは、決して獨立した科學若くは學問と稱することは可能ないから、従つて又其れは當然社會學にも存せなければならぬ筈である。

擬て然らば社會の研究すべき中心單位とは一體何であるか。之れにも亦學者により色々の見解の相異のあることは、既に前でも大略述べた通りであるが、予は姑くエルウッド氏に従ひ是れを左の三單位とし、置く。即ち(一)一切の單純な社會を組成する所以の云は、社會の成員たる個人若くは社會人ソシヤリスと、(二)團結した人々の自然的若くは人爲的若くは機能的な集團と、並に(三)通例、社會によりて承認されてゐる人々の類集或は關係とも云つて然るべき制度是れである。

A。以上のお説明で、社會に關する私の思想は少からず啓發されたが、それでも尙ほ不明な點が可なりに多い。で、遠慮なく質問をするが、社會は他の一時的の群衆や集團などと違つて、多少永續的の性質を持たないでも宜しいものであるか。

B。社會が多少なり永續的の性質を、持たなければならぬものであることは云ふまでもないこととて、其れは苟も共同生活の意義を解するものの容易に首肯し得る所であらうと思ふ。何となれば少くとも共同生活である以上、僅に一時間や一日で其の使命が完うされ、従つて其の後は直に消滅するか、其れとも亦瓦解するかする場合を、吾々は豫想することが可能ないからである。

そこで社會の定義中に、是等の補足語——即ち時間的に持続し若くは永續する意味の——を、添加した方が宜しいか否かに就いても、社會學者の間に意見の相異がある。更に其れを添加した方を可とする人々の中にも、持続の程度に關し多少の差異があり即ちフェアバンクスは「多少なり永續的の關係で結び合つた人々の一團」(a group of men who are bound together in relations more or less permanent)を社會と云つてゐるのを、ウフルム Worms は極めて漠然と「共同的に活動せる生物の持続的集團」(un groupement durable b'êtres vivants)となし、更にコルネゾは「

フェアバンクス
ウフルム

層明確に「苟も一個體の全進化を包有し得るほどの永續的な會合でなければ社會とは云はれない」

(Il faut qu'une réunion soit permanente, que sa durée puisse contenir toute l'évolution d'un individu, pour qu'on lui donne le nom de société.) と主張し、其の外に彼れは尙ほ普遍性(l'universalité)をも社會の屬性となし、従つて此の普遍性若くは一般性を有しない云は、文藝上とか商業上とかの團アソシエーション體は、同様に社會の名には値しないと唱道してゐるのであつて、同様な見解は現下英國論壇の驍將たるジー・デイ・エツチ・コールに依つても支持されてゐる。

之れを要するに社會の定義に時間的の條件を附する學者の間にも、持続の程度に多少見解の相異なることは、以上を以ても知らるる次第であるが、一體「多少なり永續的の關係」とか或は單に「持続的集團」とか、又或は「一個體の全進化を包有し得るほどの永續的な會合」など言ふことは、科學として果して妥當なものであるだらうかと考へて見るに、少くとも予は是等の補足語を添加することの、單に蛇足たるばかりでなく、却つて社會の定義の實體的意義オストロジカルと並に其の論理的意義とを賦おきふものでさへあると信するものであつて、「持続的」といひ或は「多少なり永續的」と云ふた所で、其れは全く主觀的の言葉であるから、一日でも感ずる人の如何によつては、「持続

的」とも或は「多少なり永續的」とも謂ひ得ないものでもない。

で、此の如うな補充語は寧ろ無くもがなである。復た「一個體の全進化を包有し得るほどの永續的」と云つた所で、勿論是れは前の二者に比べたならば遙に學問的とは云へるが、是れとても一個體の全進化に截然たる區劃が限られてない以上、云はゞ遺傳的に無限代に溯源し得る譯であるから、之れも決して科學的の試煉に耐え得るものではない。

であるから、社會の定義は時間的に其の意味を制限しない方が寧ろ宜いのであつて、即ちエルウッドやギッチングスなども云つてゐるやうに、社會には自然に發達した従つて割合に永續して來た所謂「自然的」のものもあれば、復た比較的に新しく發生した人爲的或は機能的のものも包括されてゐるのであるから、今その意味を時間的持續の條件などで制限するとなると、少くとも比較的に新しく發生した社會は之れを社會の定義外に驅除して、其の包容性を極めて狹隘ならしめて甘んずるか、それとも亦此の様な新生社會の將來の持續性までをも豫想して、之れを包括するかしなければならぬ譯であるが、苟も科學として既成の事實に立脚する以外、更に將來までをも豫斷することは決して當を得たものでない。

それで思慮ある爾餘の多くの現代社會學者は其の定義に時間的の制限を附することを却つて差控えてゐる所以である。

A。さうなると、社會といふものは範圍が餘りに漠然となつて、却つて諒解し難いものとなつて來るではないか、即ち少くとも二人以上の人が集まつて一寸何等かの交渉をしてゐても社會なら、幾百年乃至幾千年間連綿として同一文化を持ち、そして共同生活を營んでゐる同一民族乃至國民も社會なら、復た大きく云へば汽車や汽船や電信や並に其他の諸種交通機關の發達により世界の人類そのものが、既に或意味では少くとも何等かの共同生活を營んでゐるとも見える今日では、世界若くは人類そのものも同様に社會であると思はれるではないが、折角社會といふものが少く解りかけて來た矢先きに、それでは吾々は再び闇路に迷はなければならぬやうになる譯だ。

B。社會といふものが少く解りかけて來たと御自分では云はるるも、そんなことでは社會を少しも解つてゐない好い證據だ。何故なら君は社會の第一義が未だに解つてゐない。で、社會を何時も物質的にばかり見ようとする傾向がある。それが第一に間違つてゐるのだ。成程これは單

に君ばかりの謬見ではなく、從來は社會學者の中にも其様な癖見が多く行はれたのであるが、社會を主として心理學的に解釋する今日では、其の様な淺薄ない解は到底支持さるべくもない。

試みに一例を擧げて説明せんに、爰に社會の組成要素の一つである學校と云ふ制度がある。是れを物質的見解では、大きな建物の中に多くの生徒がゐて、其れを幾人かの先生が教へる場所といふ風に解釋するのが常であつて、従つて今若し火事でも起きて其の建物が無くなつて、生徒も先生も少くとも一時學校を休業しなければならぬやうになると、此の場合は云ふまでもなく、其の建物も幾百人かの生徒も並に幾人かの先生も、共に學校といふ此の場所に關しては存在しない譯だから、之れを物質的見解で解釋すると、少くとも此の際其の學校は滅亡したものと見るの外はあるまい。

然るに社會の心理學的見解は之れに反し、學校を主として教育されようとする生徒と教育しようとする教師と、而して其の場との三つの要素の關係——此の場合、意志結合論者に倣ひ意志の結合と云ふても可いが、餘り感心しなから關係として置く——と見るのである。

これは今後、社會を研究しようとする人々にとつて、洵に重要な點であるから須らく牢記するを要する。

人間を物質的に解釋すると、一人が一つの社會に所屬すると、彼れは最早や他の何れの社會にも屬することが可能なくなる譯であるが、社會は決して其んな窮屈なものではない。此の點に於て一國に國籍を有する一國民が、同時に他の國家の國民となることの可能ないとは大に趣きを異にし、二人以上の人々が苟も相互に多少なり意識的に交互關係を持つ以上は、其所に直に社會が發生するのであるから、吾々は必ずしも一つの社會に占有さるる必要はない。

従つて君の謂ふ所の「少くとも二名以上の人が一寸集まつて何等かの交渉(即ち心的相互作用)をしてゐる」のも社會なら、「幾百年乃至幾千年以來共通の傳統を持つてゐる一民族若くは一國民」も同様に社會であり、復たオーグスト・コムトが考へたやうに、見様によつては人類全體(Humanité)も均しく社會と認められないことはない。——尤もコムトの「人類全體」とは、スモールも云つてゐるやうに、多くの場合歐洲大陸に局限されたものではあつたやうだが——。が、唯だ爰で一つ注意しなければならぬことは、其の「一寸集まつて交渉してゐる二人」若くは「共通傳統を持つた一民族乃至は一國民」若くは「何程かの共通生活と且つ共通感興とを持つ

た人類全體」を、ドコまでも精神的に心理學的に解釋しなければならぬことだ。

何となれば社會の關する所は、其の「交渉してゐる數名の人々」や、「共通文化を有する一民族乃至一國民」や、並に「多少の交感を互に持つてゐる人類全體」やの物質的内容——是れも勿論間接的には重要なものに違ひないが——では決してなく、却つて彼等が心理的に相互に刺戟したり反應したり、模倣したり反撥したり或は協力したりする事柄、並に其の成果に外ならないからである。

A。これで復た漸く社會の輪廓は解りかけて來たやうだ。が、未だ解らぬことが數々ある中にも、差當り心に浮んで來たことは、人間以外の下等動物の共同生活若くは群居生活をも等しく社會と呼べるか、即ち社會學の研究範圍に屬するかと云ふことだ。今のお説明で見ると、社會を主として心的の相互作用と見做す限り、下等動物には社會といふものがありさうには思へないが、然るに立派な學者の中にも之れを「動物社會」など呼んで怪まない人が可なりにあるやうだ。それには何か定説でもあるのか。

B。下等動物即ち蟻とか蜂とか海狸などいふ動物の共同生活を、社會と呼んで宜しいか宜しく

ないかに關する定説はないやうだ。學者に依り勝手にどうでも呼んでゐるやうであるが、要するに其れは吾々人間の社會生活を彼等下等動物にも類推してか或は然うでないかに基づくものであらうと思ふ。即ち下等動物の生活にも吾々人間のやうな精神的要素を認むべきか否かによつて、彼等を社會と呼んで差支えないか否か決定さるる次第であるが、動物心理學者の説に依ると、彼等にも確に精神の可なりな發達があり、特に心理の高級機能である知能の萌芽ですら現はれてゐることであり、佛國のアルフレッド・ビーネの如きは實に細微有機體マイクロオーガニズムにすら洵に驚くべき精神生活の存することを其の著「細微有機體心理生活」で述べてゐるのであるが、是等を割引きして解釋するとした所で、兎に角比較的複雑な環境に適應して其の生存を完うし、且つ其の種族を殘存させてゐるほどの生物に、或程度の精神生活の發達が、あることは固より云ふまでもないが、それかと云ふて其れは勿論吾々人間のそれとは到底較べものになるべくもないことは、生物の進化史が立派に之れを證據だてゝゐる。

とは云ふても、元來生活そのものは一如であつて、下等動物の生活でも吾々人間の生活でも種類に於ては何等の相違もなく、唯だ發達の程度に於て異つてゐるのみだ。即ち下は最下級のアミ

一バから上は最高等な吾々人間に至るまで、生命の流れは縷々として糸の如く連続し、決して断へてゐるのではない。

端的に云ふと、兩者の生活相異は單に程度の問題であるから、従つて生活の一つの方面若くは作用に過ぎない社會生活の如きも、必ずしも之れを人間のみに限定しなければならぬとする理由は聊もないが、然し何ほど程度の相異であるとは云ふても、少くとも相異が存する以上、精確を期する科學的研究としては、毫も之れを看過すべきでないから、少くとも下等動物の社會は人間社會と、之れを區別して論究し且つ命名もすべきものでなければならぬ。

が、所で之れを如何に命名すべきか。之れに就いても別に定説はないが、單りチャールズ・モリスやジョルダン並にケロッグ等其他二三の學者は、生活様式を分類して獨棲的と社會的と而して共産的との三つとなし、此の外別に合體的と群居的との二つを追加してゐる學者もある。是等を詳細に論究することは非常に興味多いものには違ひいけれども、餘りに専門的となるから爰では省いて唯だ要點だけを述べるが、兎に角、人間初め其他の諸動物は、進化の道程上必然とそれぞれに其の生活様式を異にしなければならぬやうになつたものに違ひない。

A。理論がいよく佳境に這入つたやうであるが、人間初め其他の諸動物が進化の道程上、必然とそれよく生活様式を異にするやうなつたのは、一體如何なる理由に起因するのであらうか。少くとも予の見限りでの僅少な社會學書若くは社會心理學では、其の様な興味あり且つ社會を知らうとするに實に大切な方面は一向論及されてなかつたやうであるから、簡單で可いから是非に聞かして貰ひたいものだ。

B。是れを理解するには割合に深い生物學的並に心理學的の豫備知識を必要とするが、爰では論究しない積りであつたけれども、君の熱心に對して極めて簡單に其の理由を説明しよう。

成程、君のお話の如く此の問題は、餘り多くの社會學者並に社會心理學者等には論究されてゐないやうだ。即ち論究されてゐないからと云うて、社會學上乃至心理學上に重要でないと思ふ譯では決してない。重要ではあるが、生物學、心理學、而して社會學等の發達尙ほ未だ充分でなかつた過去に於ては、實際手が着けられなかつたのだ。否な今日に於ても敢て必しも完全に之れを論斷し得るとは云へないが、然しながら諸科學特に生物學が急速に發達してゐる現今に於ては、比較的完全に之れを説明し得る可能性がないと思ふ。

君の質問の要旨を直截に言ひ換へると、人間及び其他の諸動物は、何が故に其の或種族は初めから團體的若くは群居的生活を爲し、他の種族は孤獨的若くは獨居的生活を爲すかと云ふことに歸着するが、之れは要するに孰れの場合に於ても斯くすることが生活を保全する所以であるからであつて、即ちチャールス・ダーキンやハーバート・スペンサーなども云つてゐるやうに、肉食動物が多くの場合獨居性を有するやうになつたのは、獨りで居た方が却つて獲物を捕へるに都合が好いからであり、復た多くの場合草食動物が群居的であるのは、彼等の食物分布は獨居してゐるからと云ふても必ずしも利益ではないばかりが、却つて群棲してゐた方が外敵の襲來を豫知したり或は防禦したりするに非常な利益となるからである。

復た多くの場合他の助力を藉るの要ない巨大な肉食獸や、並に疎らに分布されてゐる弱い獲物を食とする矮小な肉食獸やが獨居的生活を營めるは固より當然のことであつて、之れに反し馬とか牛とかのやうな大きな獲物を食とする狼や並に其の一種などの如く、相互の協力によりて利益を得る動物が群居を以て半ば其の習性としてゐるのも、之れ亦自明の理であらう。

そこで單に食物だけに就いて云ふと、同一種族の諸成員が互に見得る區域内に於て生活しよう

とする性向を持つた草食動物のみ増々殘存し、斯くて其の群居性が層一層増大して行つて、遂に固定するやうになるのは固より云ふまでもないことで、更に之れを鳥類の場合に徴するも、例へば鶯とか梟などいふ肉食禽は多く獨居的であり、且つ蒼鷹の如きも其の産卵期間は同様に獨居的であるが、之れに反し植物の種子や其他昆虫類を食とする鳥類は多く群居的である。が、同じく群居類とは云ふものの其の中にも様々な相異があつて、其の或者は一年を通じて群居するが、他は産卵期に於ては獨居的である。

更に社會性といふことは就いてスペンサーは斯う云ふてゐる。——「元來社會性の發端は、或種の微細な精神上の變性によりて、人々の離散しようとする傾向が、通例よりは少い場合にのみ發生し得るものであつて、換言すれば幼少の間一緒に育てられた同じ親の小供が、何時までも一緒に育てられてゐようとする性向を有し、そして稍や長じてからのみ分離しようとするのは固より自然のことであるから、此の様な微細な變性のために、家族生活が苟も利益を得ることでもあれば、其の場合離散は次の代には増々遷延されて、遂には全く停止するようになるかも知れぬ。」而して此の様な作用を開始するに足りる心理的性質の微細な變化は、可なり推定することが可

能るのであつて、吾々の家畜の性質や嗜好やの相異が、如何に顯著であるかを見れば蓋し思ひ半ばに過ぐるものあるであらう。

「此様に發生した社會性と並に絶えず其れを支持し且つ増大しようとする適者生存 (the survival of the fittest) とは、更に習性の遺傳力によりて強固にされ、斯くて絶え間なく接觸して目に見えたり耳に聞えたり且つ鼻に嗅がれたりする同族の認知が、意識の主要部を形成し、さうして偶々其れの無い時は快々として樂まないほどの重大な部分を形成するようになるのは蓋し當然の事柄であつて、確に群居を以て利益とする種族の場合では、他と一緒に居ようとする慾望は、即ち一緒に居ることの習性のために、一代毎に助長されるを常とするものに違ひない。

而して此の様な慾望が如何に強大となつてゐるものであるかは、家畜の場合に吾々の日常目撃する所であつて、例へば單獨に放置された馬が、往々意氣鎮沈して友を求むの情切なるを示す場合の如き、復た群を離れた羊が再び其の群を發見するまでと云ふものは、明かに不愉快な様子を現はす如きを以ても、其の一斑を知るに足るであらう。」と

それから又米國コロンビア大學のステアート・チャツピン博士の如きも、諸動物が相互に團體

を結ぶ所以の理由を以て、其の團體によつて與へらるる利益にありとなし、且つ社會生活を以て生存競争場裡に於ける最も力強い武器であるとなしてゐる。

さうして彼れは更に言を繼いで、「馬にして若しも其の社會的精神ソシアルスピリットがなかつたならば、或は外敵と悪い風土とに抵抗することが可能ないで、直に絶滅したかも知れぬ。狼や熊でも馬が其の群から離れさへしなければ、決して其れを捕へることは可能ないのである。若し夫れ他の肉食獣でも近寄る場合でもあつて、幾多の群馬は忽ちに結合して其の猛獸を撃退し或は驅逐したりもする。また風雨が暴れる場合には、彼等は互に寄り付き、各自の體温で凍死を免れる。けれども一たび群を離れると、馬は直に死んで了ふのであつて、其の殘存者が疲勞のため半死の状態で暴風雨の後に發見された例は決して少くはない。

「普通の蟻アリの蟻は必ずしも太して恐るべきものではない上に、其の色も容易に他から見出され易いやうになつてゐるに拘らず、他の非常に強い昆虫類から怖がられ、且つ孤獨的生活を營む多くの動物が持つてゐる一つの保護器さへなくて、尙ほ其の種族が榮えて行くのは、全く其れが非常に協力的な團體生活を維持してゐるからであつて、ダーキンやワーレスなども云ふてゐるやうに

縦へ知能の外の器能は一つとして他より優つてゐるものがないにもせよ、兎に角如何にして結合すべきかを最も好く知つてゐる動物は益々進化しようとする機会を最も多く持つてゐるものである。」と

「而して知能は著しい社會的能力であつて、其れが生存競争に於ける最も有力な助手であることは、蓋し何人も異議を挟むものはなからう。言語や模倣や且つ蓄積された經驗やは、知能をして増々發達せしむる要素であつて、非社會的の動物には是れは絶えてない。此のために最大の社會性と最も高く發達した知能とを具備した動物が、各種の動物の頂上に位置してゐるのは固より當然のことであつて、斯くて最も社會的の動物は最も適者であり、従つて社會性は直接的には精力の浪費を減すると共に種族の安寧を確保することに由り、復た間接的には知能の發達を助勢することに由り共に俱に進化の主要要因となつてゐるやうに想はれる」と云つてゐるが、蓋し適言であらう。

またエルウッドの如きは諸動物が何故に集合するかを考究せんよりは、寧ろ何故に分離するかを研究する方が一層適當だとさへ言ふてゐるほどである。其の外、生物學或は心理學の方面から

此の問題を論究すれば、興味の多いことはまだく澤山あるのであるが、其れは自分が「社會性の起原並に發達の研究」として、不日纏めて世に發表する筈であるから、篤學者はそれによつて研究されたい。

A。詳しいお説明によつて、人間並に其他の動物が如何に社會生活若くは團體生活をなすに至つたか、復た一部の動物は何が故に孤獨的の生活を營んでゐるか、略ほ解つたやうな氣がする。で、今度は諸社會學者が社會について怎う定義を下してゐるか、其れを承りたいものだ。

B。前でも云ふたやうに、社會に關する系統的理論である社會學は、今日の所ろ未だ成立したとは申されない。従つて社會に關する諸學者の定義も、殆ど十人十色の觀がありて全く歸一する所はない。が、大體から云ふと何れも大同小異で甚しい軒輕のある譯のものではないから、其の一つ々々を爰に臚列した所で、固より初學者のためには何等の利益もないばかりか、却つて繁雜を増すばかりだ。それで其の中の代表的なものだけを二つ三つ引用し、且つ其の短評を試みることにしよう。

○ 先づ社會を極めて物質的に定義してゐるものは、何と云つても社會有機體説者であつて、彼等

の悉くは社會を以て一種の有機體オーガニズム若くは超有機體スーパージョニズムであるとなしてゐるが、此の批評は「社會の性質」を論究する次ぎの項目に譲つて爰では略する。

此の派の代表者の主なる人々は、コムトやスペンサーやリリエンフェルドやシェツフレーやウラムや而してノギコフ等であつて、其の何れもが社會關係を以て一種の有機的關係と見做してゐるのは云ふまでもないが、就中リリエンフェルドの如きは人間社會を眞實の有機體レアル・オルガニズムとして論じ、然るに自然と社會との間の類似乃至は自然科学と社會科學との間の類似を單に修辭上の比喻であるとなす人々は、全く無用の長物であるとさへ呼んでゐるのである。

復た社會を極端に精神的に解してゐるのは佛國のタルドであつて、彼れは單に「社會を模倣である」(La société, c'est l'imitation.)と云ふて見たり、復た或は「相互に模倣する者若くは模倣された者の子孫の總體の謂である」(l'ensemble des êtres qui simulent entre eux ou sont des descendants d'êtres qui s'étaient imités.)なども云ふて、前者の酷しく心理的であるに反し、後者は必ずしも左様ではなく、是等の場合に於ける彼れの社會觀念は、必ずしも爾く明瞭であるとは評されないが、然しながら兎に角「相互に模倣する者即ち心的相互作用を有する者の一團」を以て、

彼れが社會と見做してゐることは疑ふべくもない。

其の外、社會を其の諸成員間の契約の成果と見做す社會契約論者は、多く社會を精神的に見てゐるが、之れにも幾多の缺點がある。そして社會有機説と契約説とを折衷しようとしたフイエーやドウ・グレーフや並にブルジョアなどの説も必ずしも完璧とは云はれない。此の時に當つて現はれたのが、即ち以上の諸見解の短所を補充すると同時に、且つ其の長所を悉く綜合しようとしてゐる心理學説である。

この中にも勿論見解に様々の微細な相異があり或者は社會を單に「人々の關係である」(Wright, Stuckenberg 等)となし、復た他の者は「人類の相互關係である」(Ratzenhofer, Small) 等とも云つてゐるが、人々の相互關係は要するに精神的若くは意識的のものでなければならぬから、吾々は社會を「心的に相互作用する人々の一切集團」若くは「多少なり意識的に交互關係を有する人々の一切集團」と見做すエルウッド氏の定義を只今の所では最も科學的に妥當なるものと信ずる。

三、社會の性質

A。既に社會の意義、即ち社會とは一體どんなものかと云ふことに就いては、大略ながら心得た積りだから、是れから社會の性質に就いて知りたいものだ。前でも一寸言はれたやうだが、社會には契約説とか有機説とか或は心理説など様々な見解があるらしい。所で、吾々には其の中の孰れが、一番妥當なものであるか一向に解らないから、一通り御教示を願ひたい。

B。社會の性質に關する諸説を一通り述べて呉れろと云はれても、其れにも順序があるから然う漠然と説明されるものではない。で、己むを得ないから先づ是等の諸説の發達順序を標準として社會の契約説から論究することにしよう。と云つても何も、契約説が一番最初に唱へられたと云ふ譯では決してないが、此の説が最初エビキュラスに唱道されて以來、シセロやセント・オーガスチンやの手に依りて、割合に早くから發達したことは到底拒むべくもない。

けれども、此の説が眞に其の完全な形態を備へるようになったのは、蓋し十七八世紀の法理學者や政治學者や並に哲學者等の努力によりてであつて、英國のホツプスの如きロツクの如き、復た佛國ではボスウエの如きルウソアの如きバブーフの如き、更に哲學者としてはスピノーザの如きカントの如き、皆な此の時代の代表者である。契約説は單り十七八世紀に於て其の隆盛を見た

ばかりでなく、爾來今日に至るまでも尙ほ幾多の支持者を有するのであつて、即ち十九世紀に於てはカービーやブルドーンやルヌヴィエやがあり、更に現代に到てもワーナー・フアイトやジー・デイ・エツチ・コール並に其の一派の組合社會主義者に、鏘々たる後援者がないでもない。

復た見様に依りては、スタッケンベルグ——社會に關する氏の見解は、時とすると前でも述べたやうに、單に關係であると思へば、又時とすると「社會力の結合」合若くは相互作用である」なども云ひ、更に時とすると、「諸意志の合同若くは綜合」なども言ふて、怎うも曖昧ではあるが——や遠藤隆吉氏や、並に樋口秀雄氏等（？）の意志結合説も、彼等御自身は之れを承認しないかも知れぬが、兎に角一種の契約説若くは準契約説と見做されないことはなからう。

元來、契約説は社會を諸個人間で表示した或は默認した合意、若くは契約の上に基づく合理的並に人爲的の構造に外ならぬとするものであつて、換言すれば社會の諸制度は素と人々が任意に發明したものに外ならぬから、苟も其れが契約當事者の意志に適合しない以上は、其れを改造するも決して不法ではないと主張する説である。

即ち此の説に依ると、一切の社會組織は云はゞ個人間の自意識的な關係の結果に外ならぬから、其れは何時も關係當事者の相互的同意に基づくものでなければならぬ。従つて社會組織にして苟も人々の意志に背馳する限り、其れは何時でも改造されなければならぬものであつて、例へば政治制度の如き家族制度の如き或は財産制度の如きも、要は之れに關係せる人々の相互的合意若くは相互的便宜の上でのみ支持されてゐるものであるから、是等の諸制度にして一たび人々の意志に合致せざらんか、人々は直に之れを改造して、再び之れを自らの意志に適ふやうなものたらしめなければならぬとするのが契約説の要旨である。

A。若しも契約説のやうなことが眞理だとなると、社會は何時も改造々々で日も之れ足らぬやうになりはしなからうか。と云ふのは、何れの社會に於ても總ゆる人々の意志が、何時も合致してゐると云ふことは決してあり得ない筈だからであつて、換言すれば特に人々の利害關係の變化の激しい現代の如うな場合に於ては、縦へ一期間に於ける多數者——此の場合でも少數者の意志離反があることは固より疑ふべくもないが——の意志の合致を見ることはあり得ても、其れも恐らく短時期のことで、次ぎの時期には必ずや一致が亂れて、茲に程なく社會改造の端緒を開かな

ければならぬようになるからである。

B。契約説の長所も其所にあれば短所も亦實に其所にあるが、如何ほどに長所があり又短所があるからと云ふても、基は社會學者としての吾々の茲に關係する所ではない。何となれば、社會契約説に對する科學者としての吾々の態度は、必ずしも生活原理として其の價值不價值、即ち長所短所を云々するにあるのではなく、却つて其れが社會の構造そのものを如實に表示してゐるや否やの其の當不當を判斷すれば足りるからである。

此の點に於て、契約説は之れを一個の社會的理想若くは主張として見れば、固より必ずしも非議すべき點はないが、之れを儼然たる社會的事實の説明とすると、吾々は遂に其の可なる所以を見ないのであつて、人間社會を以て徹頭徹尾、理智の表現と見做さない限り、即ち其所にある多量の物理的、生物的、並に一層深奥な心理的要因を故らに閑却しない限り、吾々は到底社會を以つて人々の合意に基づく契約の成果とのみ見做す譯にはゆかない。

最も智能の進歩するに従ひ、總ゆるものを理智的合理的に、整理し或は措置しようとする要求が、漸次人々の間に芽ぐみ、斯くて其れが結局熾烈な主張となつて發現することは、固より數の

免るべからざる所であるから、従つて割合に多量な物理的、生物的、並に低級な心理的の諸勢力のみによりて、支配されて來た過去の非合理的な社會に對し、明澄な理智力が絶えず其れを牽制し變形し、而して少くとも一方面に於ては何時も改造を試みようとしたことは、之れ亦固より當然のことであつて、按ふに契約説の如きも即ち斯くの如き必然の要求に促されて現はれたものではあるまいか。

果して然りとすれば、社會契約説は一個の主義若くは主張としては固より差支えないものであるけれども、社會的事實の説明としては決して當を得たものでない。と云ふのは、社會生活の全方面を解説する最新の心理學では、人間の諸制度を以て單なる任意的の發明とか、或は合理的及び人爲的な構造などとは勿論見做さなればかりか、却つて其等の制度を以て物質的環境に増々廣く適應し、斯くて彌々複雑にならうとする人間の集合生活の自然の要求として、發生したものと説明するからである。

A。して見れば、契約説は人間社會に於ける本能とか感情とか或は習性などの力を少しも認めないものか。

B。社會契約論者の中には、社會を全然一つの組合のやうに見做したものの、又現に見做してゐる人々（即ち組合社會主義者の如き）もないではないから、その様な極めて限定された社會觀を持つた人々は、勿論社會の中の本能的感情的並に習性的の要素などを認めてはゐないのである。

けれども數多い契約論者の中には一種の變態説を奉ずる人々もあつて、此等は暗々裡に社會に於ける以上の心理的諸要因を認め、さうして社會の諸制度を敢て必ずしも契約とか相互的合意などから發生したものとはしないで、却つて社會並に諸制度を以て是非とも契約の基礎の上に組織するよう進めなければならぬとし、且つ曰く、社會生活の諸様式の如きも、過去に於ては固より相互的合意の上に築かれたものではないにしても、而も早晩は斯くあり得るものである共に、又必ずや斯くあらなければならぬものであつて、其の適例は掠奪や賣買並に其他の強制手段によりて行はれた原始社會の結婚制度が、文化の發達するに従ひ漸次相互的合意の上に行はれようとするのを見ても、之れを知るに難くないであらうと言ふてゐる。

けれども、此の變態説でも其れは要するに社會が將來成らうとする傾向、若くは成りたいと思ふ願望を述べてゐるに過ぎないものであつて、其れが暗黙ながらも社會の物理的、生物的、並に

低級の心理的諸要因を認めてゐるのは、他と較べて確に一進境を開いてゐるものには違ひないけれども、未だ決して眞に社會の本質を理解せるものとは云はれない。

が、其のために吾々は此の契約説特に變態的契約説の中に、含まれてゐる幾多の眞理までも没却すべきでは決してないのであつて、洵に人々の理智は一切の社會的進歩と協調とに對する重大な指導的の役目を持つてゐると共に、且つ自然法則とか或は人々の共同生活の法則とかが、一層明瞭に諒解さるるに従ひ、人々の利益も亦増々助長せらるるものであるから、其の點に於て契約説の言ふ所は確に當を得たものと云はなければならぬ。

A。社會の必然的な要求に促されて、契約説が現はれたと解するのは洵に面白い見方だ。成程歴史を繰つて見ても契約説の旺んだつた十七八世紀は、英國でも佛蘭西でも或は其他の諸國でも人々が或種の社會的威アムプレッシン壓に惱まされて、正に改造を憶ふの念切であつた時代だ。現代と雖も素より然らであらう。所で、社會有機説には其の様な必然的な發生理由若くは存在理由レゾン・ド'être (raison d'être) とでもいふやうなものはないのか。

B。詮索すればないこともあるまいが、此の場合に於ては、寧ろ社會的の發生理由——これも

勿論幾らかはあるに違ひないが——と云ふよりは、却つて學問上の其れが多かつたやうだ。と云ふのは、コムトが初めて社會學を建設した當時は、生物學の研究が非常に旺んであつたからであつて、彼れが社會有機説を信奉するには、一方ならぬ影響を其の當時の社會状態から受けてゐることは固より云ふまでもないが、コーカーなども云つてゐるやうに其れよりも更に一層、生物學と社會學との性質上の類似は、詰まり彼れをして社會を一種の有機體視せしめるようにならしめたものに相違ない。

其の外、ハーバート・スペンサーにもせよ、リリエンフェルドにもせよ、シエッフラーにもせよウラルムにもせよ、將たまたノギコフにもせよ、苟も社會有機體論者中の代表者とも稱すべき人々は、何れも生物學の研究よりして一般有機體と社會との共通性質を類推し、斯くて其の論據を立てゝゐるのであつて、就中、スペンサーの如きは社會現象を説明するに、どこまでも有機的類比の方法を用ひ、且つ有機的の用語を使用してゐるほどである。

A。社會有機説の中心思想は一體どんなものか、其れを承つてから更に質問を續けたい。契約説と違つて有機説は、ナカく要領を得ることが確かしい。

B。左様であらう。社會有機説など何人も雜作もなく口にしてゐるが、實際其れを能く解して云つてゐるものは恐らく百人中の一二であらうと思ふ。何となれば是れが能く解るには、少くともコムト初め、スペンサーは固より云ふまでもなく、其の外更にリリエンフルドやシエッフレイやウアルムや並にノギコフ等の見解の少くとも梗概を、窺知しなければならぬからである。

と云ふのは、同じ有機論者の中にも見解に非常の相異がある、其の一例を挙げると、個人を社會の單位と見做すのにも、スペンサーは個人の肉體的特質の一切をも包括せしめてゐるのであるが、然るにリリエンフルドの如きは之れに反し、單に神経系統の範圍内に於てのみ、個人は社會の細胞たり得るものであると主張してゐるからであつて、其の外にも細目の點に至つては、各自の見地に非常の差異がある。

が、社會を合理的人爲的の構造ではなくして、却つて有機的進化の結果であり、従つて社會の本質も一個の有機體でなければならぬ——縦へ嚴密な意味での生物有機體其者ではないにしても、少くとも其の性質と構造とに於て、生物有機體と似てゐる——とするに於て、大體上は互に見解を同じうしてゐるのである。

復た多くの有機體論者の主張する所に依ると、社會有機體と生物有機體との間には固より多少の相違點がないでもないが、然し幾多の類似點は其相違點よりも遙に重大なるものであつて、別けても社會の發達の如きは他の有機體と同じく、自然法則の作用によりて生長と衰亡との一般法則の理に従ひ、且つ社會の統一も生物有機體の統一と毫も異なる所はない。そのみならず社會の諸部分間の生理的依屬關係は、之れ亦生物有機體の場合と全く同一であるとなしてゐるのである。

特にリリエンフルドの如きは先づ無機體と有機體との特質の相違とを數へて、第一に有機體の諸勢力は一層強烈にして一層變化のある相互作用から成立してゐるに反し、或無機體の性質を決すべき特質たる内部振動は何時も同一であつて、即ち無機力とは單に同一運動の反復に過ぎないが、然るに有機力は常に一定の因果關係に因りて互に相繼起するも、而も時を異にしつつ種々なる運動圏内に於て活動するものである。此の點に於て自然有機體と人間社會との差異は單に程度の問題であつて、後者には實に多様多質なる運動があり、従つて自然有機體よりも一層高い程度で、因果力や物質力や並に必然力やを支配する目的性 (Zweckmässigkeit) と心靈性 (Geistigkeit) と並に自由性 (Freiheit) とを有するのみであるから、其れは云はゞ非常に多方面に發展した有機

體たるに外ならない。

第二の相違點は有機體の内的統一に關することであつて、無機物の統一は一つの重心に對する諸分子の粘着的引力、即ち物體は其の堅固を破壊し又其の外形を變更しようとする外界の勢力に對する抵抗力に存するに反し、有機體の統一は諸勢力の一定した因果關係の相互作用、即ち不斷に變化する運動の聯結並に繼續であつて、此所には諸勢力の内的相互作用は一つの固定した形態を生ずるものではなく、却つて相互間に密接な聯絡を有し且つ互に相繼起する形態の連續を指すものに外ならない。さうして人間社會は一切有機體中の最高等な統一體を形成するものであつて、其の中には運動の目的性と形態の變化性とがあり、諸特種部分の獨立は同じ一般原則に對し、恒久にして必然な從屬關係をなせざるである。

物質と勢力との作用の此の様な目的性フウエクメツシヒカイトは有機體の第三特質をなすものであつて、例へば石の地に墜ち磁石が鐵を引くのは、何等の目的をも持つてゐるものではなく、從つて諸勢力の作用は諸物體の連續した存在に對し、何等の認むべき關係もないのに反し、有機體に於ては其の中の最も下等なもの運動でも、必ずや何等かの目的があるから、況んや最高の有機體に至ると、其

の目的性の顯著なことは固より説明するまでもなく、特に人間の意識や理性や並に意志やに於ては尙更ら左様である。而して社會は其の目的性の最高表現たるものであるから、從つて社會的活動に何等かの目的あることは固より云ふまでもない。

第四に有機體は其の構造の完全性(Vervollkommnung)なるを以て特質とするものであつて、其れは内外の諸部分並に是等に屬する諸機能の分化が次第に増加するに基因するものである。然り而して此の分化たるや、有機體が其の環境に對し絶えず適應しようとする事、即ち有害な諸々の勢力を排斥して、有利な物質を攝取しようとするから發生するものであつて、此の特質が最も完全に現はれてゐるものは、之れ亦人間社會を措いて他にはない。

最後に資本蓄積(Kapitalisierung)——未來の消耗のために勢力と材料とを蓄積する謂——は、特に顯著な有機的機能の特質の一つであつて、此のことは復た社會に於ても特段に著しく表はれてゐる。自然有機體と同じく社會に於ける資本蓄積は、外的物體の蒐集即ち材料と勢力との内的集積や化成やの形成に於て行はれてゐると云ふて、リリエンプフェルドは其の具體的な諸事例を列擧し、且つ曰く人間社會は獨り有機體の是等の五大特質を具備せるのみならず、剩へ是等の諸特

質は特に人間社會に於て、一層高等に且つ一層完全に發達してゐると。更に彼れは言をついで、然るに他の有機體が確定せる形態を有するに拘らず、社會が一定せる限界内で相互作用しない諸單位の結合から成つてゐると云ふので以て、兩者の類同を反駁しようとする論者の如きは全く思はざるの酷しきものだと言評してゐるのである。

以上は社會有機說の中心思想を知らうとする人々のために、少しく冗長ではあつたが紹介した次第だ。其の外更にシエフレーやウヲルムやノギコフ等も、それづくに特色のある社會有機說を唱へて居る。是等を一々爰に列舉して比較研究を試むることは、有機說の中心思想を知るに洵に大切であり且つ興味の多いことには違ひないが、それは初學者にとつては却つて煩瑣であると思ふから、左にノギコフの擧げてゐる巧妙な一つの比喩と説明とだけを引用して、以て社會有機說の核心に觸れて止まう。

ノギコフ論すらく、今試みにひとり人の身體を一百万倍擴大し得る機械を以て、吾々の一百万分の一の身體の者——然し吾々と同じ程度の知能を有する者——に觀察せしむるとせんか、此の者にとつては人間の身體は洵に驚嘆すべき集合體であつて、即ち其の分子と分子との間隙の大

なることは、殆ど社會の或方面に於ける人と人との間隔の比でもなからう。復た其の上に彼れは身體の一切の部分が、殆ど全く眩暈めまいを催うすばかりの速度で以て活動してゐるのをも認めるであらう。

さうして今、此の觀察者にして人體に關する總體の心象 (representation) を得ようとして、實に此の身體の諸地方 (即ち身體の諸部分) を如何ほど緻密に旅行するも、尙且つ彼れは此の機制 (mecanisme) が、一個の統一體であることは諒解し得ないかも知れぬ。即ち長い時に於て彼れが漸く確信し得たことは、丁度吾々が希臘や伊太利やを觀光して得たと同様に、手や足やの各々は他と全く違つた部分を形成してゐると云ふ位に過ぎないであらう。

空間の觀念は全く比較的のものであつて、吾々は或物を凝結コンクリート的といひ或は分離ディスタクト的なりと稱するも、其れは要するに吾々が此の物を構成せる諸單位間の間隔 (intervals) を見ると見ないとに因るものであつて、例へば吾々の太陽系に屬する星群 (l'annee stellaire) は其の部分たる星と星との間隔絶大なるが故に、吾々には全然分離ディスタクト的と見ゆるけれども、然るに吾々との距離更に一層大なる星群になると、其の諸星間の間隔は吾々の肉眼では到底認め難いから、全く凝結コンクリート的と見ゆる

が如き其の一般である。

此に於てか即ち知る、人は決して其の肉眼に信頼して苟も科學的分類を爲し得べきものではないことを。(On ne peut pas baser des classifications scientifiques sur la conformation de notre oeil.) であるから、社會の諸元素が互に相密着しないやうに見えるからと云ふて、之れを直に有機體でないと断定しようとするのは、實に非常な癡見と云はなければならぬと、ノギコフは嘆息してゐるのである。

A。聞いて見れば有機論者の説く所は實に偉大な思想で、吾々には殆ど全部が眞理と思はれてならぬ。全く面白い説だ。勿論、社會學の素人たる吾々に、此の説の詳細な内容を吟味する能力の持ち合せがないことは云ふまでもないが、單に常識上から判断しても、現に社會生活を營んでゐる人々が總ゆる點に於て益々連帶的即ち有機的關係を結ばうとしてゐる今日に於ては、大體上有機説は現代社會の性質を解説するに間然する所ないものと思ふが、御意見は如何。

B。君の云はるる通り、社會有機説は實に偉大な思想だ、否、社會理論に關する人間の驚くべき發見の一つだ。文化が發達し交通機關が開けて、人々が頻繁に關係するやうになるや、自然に

其れが一種の有機的關係に類するものとならうとする傾きのあることは固より云ふまでもないが、然るに之れを以て人間社會を直に一種の(少くと高等な)有機體であると斷する理由が果してあるであらうか。

試みに人間社會が眞の意味の有機體でない理由を列舉すれば、――

- 一、社會は種々の有機個體を包括するものである故に、其の複雑な點で有機體を超越してゐる、之れスペンサー自ら之れを認めて社會を超有機體(super-organism)となしてゐる所以である。
- 二、社會を組成してゐる諸元素即ち諸個人はそれ〴〵に獨立の生活と目的とを持つてゐるけれども、然るに有機個體を組織する諸要素即ち皮や肉や骨や筋等は是等を有しない。
- 三、有機個體に於ける部分は全體のために生活するけれども、社會に於ては必ずしも然うではない。

四、社會は高等な動物有機體に於ける如うな脳と神經とを有しない。――此の點でハクスレー等は大にスペンサーを攻撃したがスペンサーは別に適當な答辯をなすことは可能なかつたやうだ。復たリリエンフルドも社會が有機體なる故を以、自然有機體の頭や眼や耳や並に其他

やに相當する諸器官を持たなければならぬとするのは實に愚の骨頂だとなし、現にシエフレーは國家を以て社會神經系統の中心的統制や整理やの諸機關と、並に其れを保護し支持し若くは奉仕する補助機關とを包括するものであるとなしてゐる。

五、有機個體は實體を有するけれども社會は之れを有しない。

六、社會の諸成員は自由に行動することが可能だけれども、有機個體を組織する諸要素は之れが可能ない。

七、社會の諸機關を構成する諸成員は必ずしも終身的なものではないが、有機個體の諸機關を構成する諸細胞は然うである。

八、有機個體特に高等な動物有機體に於て、同情は何時も總體的なものであるが、然るに社會に於ては一部に限らるる場合が多い。

先づ大略以上の如く言ふことが可能るやうであるが、然るに同じ有機論者の中にも、人間社會を以て必ずしも厳格な意味での生物有機體ではなく、云はゞ單に生物有機體と多くの類比を有するに過ぎないとする學者も少くはないから、其の點に於て有機説の角も少からず除かれる譯である。

る。

だが、有機論者の多くは、社會を以て盲目的な有機力の作用によりて自然に發達したものとなし、且つ社會契約論者の主張するやうな合理的人爲的の理智的統制に依る所は殆ど無いとする點に於て、全く一致してゐるのであつて、特にスペンサーの見解の如きは其の尤なるものである。

即ち彼れの信する所に依れば、社會は一種の自然的且つ有機的構造であるから、人にして苟も社會生活の自然的作用に干渉し得ない限り、社會の理智的統制などを望まは固より不可能のことであつて、云はゞ一種の超人的構造とも稱して可なる社會は、到底科學などで能く之れを解説し得る所のものでない。

さうして此の様な信念は遂にスペンサーを驅りて社會生活に對する全然たる自由放任主義を探るに至らしめた所以であるけれども、然し全然としての社會有機説が近世社會思想史上に寄與した功績は洵に著大なものであつて、即ち其れが有機進化と社會進化との眞の關係を力説し、斯くて社會生活の連帶的性質と並に諸々の社會制度とが、決して契約論者の主張するやうな單なる人爲的合理的の成果ではないことを強調し、併せて人類の社會的生活は元來有機的生活の一方面で

あること、並に社會の統一と連帶とは、生活作用の本源的にして且つ持續的な統一の一つの表現に外ならないこと等を高唱せる點に於て、其の功決して尠少でないことを知らなければならぬ。が、兎に角社會有機説は千八百九十七年巴里に開催された萬國社會學會に於て、多數の學者により否認されて以來、今は殆ど之れを學問的には口にする者がなくなつた。さうして今日は之れに代ふるに多く社會連帶てう語を用ゐるやうだ。

A。是れまでお述べになつた社會契約説と社會有機説とは、一は人間社會を専ら理智的人爲的の方面から見、他は其れを盲目的生物的の方面からのみ觀察してゐる點に於て、成程洵孰れも重要な見解には違ひないが、然し復たお暗示のやうに、其れでは人間社會を全面から眺めた金匱無缺の説とは決して申されないやうだ。して見ると、是等の兩説を折衷し調和させれば、即ち完全な社會學説が出来るのではあるまいかと、吾々素人でも容易に感じつくことであるが、さうは行かないものか、復た實際さう云ふことを企てた學者はなかつたのか。

B。學問界の何れの方面に於ても、二つの極端な反對説の間には必ず其等を調和させようとする折衷説若くは中間説といふものが出現するものだ。が、從來の例で見ると、折衷説若くは中間

説といふものは、多くの場合、失敗或は少くとも無勢力に終つてゐる。而して豊富な材料と經驗と、並に犀利な批判力と創造力とを以て、事象の全局面を開拓すべく其の後から生まれ出る綜合説が、却つて多くの學問的價値を有する習ひだ。

社會學界に於ても亦其の例に漏れず、君の想像するやうに、確に社會契約説と社會有機説との兩極端を調和させようとして、一つの折衷説は生れた。即ち其れは社會の性質を以て一種の契約的有機體であるとして、有機説と契約説との調和を圖らうとする一派であつて、ド・グレーフやフイエーや並にブルジョアなど其の代表者である。

今、此の説の概要を示さんため、左にフイエーの見解を少しく述べんに、彼れは社會の根本原則として、一方に於ては其の契約的起原と性質とを認めつつ、他方に於ては社會に生物有機體の有する重要な諸特質を認めてゐる。即ち彼れは一面に於て社會の有機的特質を列舉して、(一)生ける全體を保存するために各種の部分が一致協力すること、(二)體系的の構造は能く諸成員の此の様な機能的の分化に適當せること、(三)諸要素の有機的活力、(四)運動の自發性、(五)進化若くは發達と衰微とをなしつつ而も他面に於ては個人を以て、社會の唯一の心的主體にして又唯一

の社會的人格なりとし、斯くて社會有機體の特色として其の感覺中樞 (sensorium) の缺乏せることを極力主張し、これこそ初めて社會有機説と社會契約説との調和すべき一層包容的な契約説有機説 (l'organisme contractuel théorie) とはなるのであると言ふてゐる。

彼れは社會を以て、一面、自然的產物たると同時に、他面また人工的產物ではあるが、然し其れは自然に反する意味の人工的でなくして、却つて自然と一致する技工の作物であり、更に復た社會は自分自身が運動と變化との原則を有するから自然的生物であると同時に、而も其の存在たるや、人々の思想中にあるから技工品である。端的に云はゞ、思想あるが故に社會あるのであると妙な論法を用ゐてゐる。

是等の企ては元來異説を強めて綜合しようと試みたものであるが、然るに其の綜合たるや、事實に基づく推理の上には立たないで、却つて互に相對抗してゐる兩説を努めて融和させようとする單なる論理作用の上に根據を置いたから、其れが眞の綜合にならなかつたのも固より是非もないう次第であらう。

其の外、更に社會有機説の陰鬱な定命的論調若くは生物學的宿命觀を緩和するために、一種の

哲學的有機説とでも命名して然るべきものがアイ・エス・マケンジーによりて唱出された。が、之れは要するに有機體てふ語を哲學的の廣義に解して、人類の社會生活の統一性並に相互依從性を強調せるものに外ならないから、之れに對しては、固より何人も敢て異議を挟む餘地はなからうが、それかと云つて社會理論として決して完璧なものと稱することも可能ない。

A。既に社會契約説も、社會有機説も或は又其等の折衷説たる契約的有機説も、若くは哲學的有機説も、一樣に完全な社會理論としては支持されなくなつたとすると、其の他には前のお話で社會心理説とか稱するものの外はないやうであるが、其れは果して一切の妥當な諸説を綜合し得るだけの包容力があるものか。吾々の考ふる所では、其れは社會契約説と兄たり難く弟たり難いもののやうにさへ考へられてならぬが……

B。社會心理説を然る卑近に解するのは單に君ばかりでなく、從來は往々にして一とかどの學者にすら曲解されて、或は模倣暗示説や同情説や乃至は君の考へてゐるやうに契約説とも同一視されたことがあるが、今日では其の様な淺見では通らない。

と云ふのは、現今の心理學では單に意識の現象ばかりを研究して止むものではなく、又能く行

動の生物的條件並に勢力をも重要視すると共に、兼ねて一般有機體と併せて其の環境をも考究することを決して閑却するものではないからである。

従つて社會心理説を以て、單に摸倣若くは暗示説とか、或は同情説とか、又或は純然なる理智に基本を置く契約説などのやうな、僅に一方面の心理的要素のみで社會を解説しようとするものと見做すのは酷しい曲解であつて、端的に云ふと、社會心理説こそは實に其の廣大な包容性によつて、社會生活の全方面を網羅すると共に、復た他の一切の妥當な社會的諸理論を綜合するための基礎を据えるものと云はなければならぬ。

されば、社會の心理學の見解は、上來述べたる契約的若くは有機的見解とか又或は其等の折衷的見解等の孰れとも、混淆することの不可能な特有の見地を有するものであつて、即ち一方に於ては有機的見解と同様に社會の有機的諸勢力に重要な位置を與へつつ、他方に於ては更に契約的見解の特長をも認めて、社會の進化其の歩を進むるに従ひ、益々心理的要素特に理智的作用の重大なる機能を看取するに決して吝なるものでないのである。

其の上に、社會心理説は舊に模倣や同情や理智的諸要素や將た意識的の社會統制等の如うな心

理的諸要因やを以て、社會生活を解釋するばかりでなく、復た能く環境の諸要因の影響をも重視し、斯くて全社會生活を主として習性や適應やで以て考察しようとするものである、即ち社會心理説は單に生物的並に理智的要素ばかりを綜合して止むものではなく、實に人間の社會生活と關係する一切の諸要因は、悉く其の藥籠中に包容さるるものと云はなければならぬ。

A。今までお述べになつた所で察すると、社會心理説なるものは別に吹聴ほどの特長も價值もなく、云はゞ總ゆる社會的要因並に社會的理論を、雜然と綜合したと云ふよりは寧ろ混淆した一種の鵠的學説カウチとしか思はれない。が、何とかモット徹底した説明法はないものか。

B。君は却々性急だなア、さう時々言葉の先きを越されては困る、辛抱して終りまで聞いてから解らぬ場合に質問し給へ。鵠的學説とはひどいね。社會心理説には毫も其の様な曖昧な點はないのだ。左に現今、社會心理説の權威者たる米國ミッショリー大學教授エルウッド氏の見解を紹介すると共に、兼ねて卑見をも述べよう。

社會心理説は社會生活を以て、側人の心理作用が活動要素となつて働く環境に對する一つの適應作用と見做すものであつて、切言すれば、社會生活は一つの作用に外ならない。が、其の作用

は主として心理的の諸要素たる交通や暗示や模倣や同情や而して鬭争等の如うな個人間の相互刺激や反應やの諸様式からと、本能や習性や感情や並に知能などの如うな個人内の心理作用から成立つてゐるものであることを知らなければならぬ。

で此の説に依ると、社會作用は決して純然たる主觀的のものではなく、却つて其の重要な要素が心理的であると云ふ意味でのみ心理的と稱し得るものであつて、尙ほ一層之れを簡明に云ふと、社會作用とは個人間に於ける相互適應的整齊の精神物理學的作用とも稱して然るべきものであるが、而も其れは全く個人間の精神的相互作用に依りて行はるる一つの作用であるから、其の主要なる要素は所詮之れを心理的と云ふの外はない。

加之、社會心理説は人々の心奥に存する性癖や氣質や、並に人々の變更し得る性質に及ぼす環境の影響や、且つ其の結果として自ら發達する人々の目的や標準等をも、等しく社會生活の重大な作因と做すものであるから、従つて社會生活が發展して行つて其の結果生ずる統一や均整や之れ云ふまでもなくロツスの所謂人々の心的平面上メンタル・レベルに存する統一並に均整に外ならないと共に、復た其等は云はゞ人々の諸活動の協調、即ち個人間の協調乃至は相互適應の謂に外ならないから

开が共に個人の感情や觀念や並に標準やによりて影響さるることは固より云ふまでもない。

之れと同様に、社會生活の持續も決して單なる物理的平面上に於ける持續のみではなくして、主として心理的平面上に於ける持續であり、語を換へば其れは固より遺傳的基礎の上に立つてゐるものではあるけれども、而も多くは習得した習性の持續の謂であり、更に言葉を換へて云ふと其れは一つの時代から他の時代へと、不斷に傳ふる知識とか觀念とか標準とか並に價值とかを、社會生活によりて保存する持續の謂でなければならぬ。

而して是等の思想や標準や並に價值等は、原始人類以來今日に到るまで、漸次に累積發達して遂に現代の歴史を構成するに至つたものであつて、別言すれば人類の歴史は其の内面的精神習性の一部が、代を経るに従ひ増々其の複雑を加へたものとも言ふことが可能であらう。此の點に於て人類の歴史は、云はば一つの生長する傳統であつて、人間社會は又之れを一つの社會精神とも見做すことが可能であらう。

然るに此の様な社會精神ソシアル・スピリットなるものが、其の内容たる個々人の思想や標準や並に價值等を離れて到底諒解し得べきものでないことは、固より云ふまでもないことであつて、是れ社會生活が單な

る動物的平面よりは、遙に超逸してゐる所以であると共に、復た其れを純然たる有機的若くは生物的方法では、解決し得ない所以でもある。

前でも云ふたやうに、社會生活は一つの作用であつて、詳しく云ふと、其れは他と共に生活する作用である。吾々が之れを稱して、更に心理作用と呼ぶ所以のものは、其れが衝動や習性や感情や並に觀念等の心的諸要素に伴ふものであると共に、交通や、模倣や、暗示や同情や並に其他の諸種の心的相互作用に於ても、是等心的諸要素の表現は最も重大な構成要素であるからであつて、復た此の作用は固より分化もし統合もするが、然し其の場合でも、常に共同の活動を營むやうに指導せられてゐるものであるから、其の物質的方面と同様に心理的方面に於ても、均しく統一され渾化されてゐることとは、固より云ふまでもない。之れを要するに、全體としての社會生活は、即ち人々の感情や思想や並に標準やの如うな心的諸要素で以て影響されてゐるものであるから、今若し之れを科學的に簡潔に説明しようとならば、吾々は勢ひギツヂングスに倣ひ、之れを刺戟と反應ステムラスレスポンスてう語で言ひ表はすの外はない。

更に一切の社會作用を極めて簡単な言葉で言ひ表はすと、相互刺戟と反應といふことになるが

即ち、個人間に相互刺戟と反應とがあるからこそ、暗示も模倣も同情も契約も反感も闘争も可能であり、復た言語も民俗も風習も乃至は其他の複雑した文化的社會的の諸要素も發生したものに違ひない。所で、此の様に渾然として一貫し且つ尠然として多様な社會生活の全面目は、固より到底かの契約説のやうには社會生活の理智的方面のみを強調するもの、復た有機説のやうに其の盲目的な生物的勢力のみを重視するもの、更に復た其他の少くとも社會生活の半面のみを見るものには到底正解せらるべくもない。

是れ實に社會心理説の獨り能くし得る壇場であつて、即ち其れは一面に於ては社會の斯くの如き一切の心理的諸要因を重大視しつゝ、而も他面に於ては復た其の物質的環境や並に生物的勢力やの影響等までをも、決して等閑に附することをしないものであるから。

A。是れで漸く社會心理説なるものの概要も解つた。成程意味深長にして目つ博大な學説だ。結びひび一口で云ふと、社會心理説は精神を其の進化的並に發生學的過程から觀て、其れの全作用の社會方面を悉く包括させてゐるものだね。で、苟も精神的要素の關する限り社會心理の題目でないものはない筈だから、其れが一般の生物的勢力や且つ其の環境や、尙ほ況んや精神の一層高

等な側面である理智的要素等は、勿論悉く包括しなければならぬことは固より云ふまでもない。して見ると、社會心理説は契約説の社會改造觀や有機説の社會宿命觀やに對しても、亦一つの見解を持つてゐなければならぬ筈と思ふが如何。

B。いかにも其の通り、社會心理説は社會の變形に就いても兩説の極端論を排し、如何にして社會を最も有利に變形させるかと云ふことに關する唯一の關鍵として、先づ個人の性質を研究することに在ると考へてゐる。

由來、社會生活を成すものは、人々が發展させる其の社會的態度に存するものであつて、即ち此の様な態度は人々の有機的性質に其の根柢を有しつつ、主として習性となるものである。で、社會生活を變形する問題は、又主として大多數の人々の習慣を、如何にして變形させるかと云ふ問題に歸着する。

社會心理説の教ふる所に依ると、人間社會の變形は、云はゞ、人間性の變形し得ると同じ意味若くは同じ程度でのみ可能なものであつて、开は固より決して彼の契約論者の主張する如くに、總ての人々を満足させ得る程度に勝手に改造し得るものでもなければ、復た有機論者一派の思惟

する如くに、人智の到底到達し得ない超自然的の運命に支配されてゐるものでも決してない。

それ斯くの如く社會の組織や制度やは、元來人々の習慣の上に立つものであるから、物質的自然と人間性と、即ち物的と心的との兩環境を、變化させ得る範圍内では容易に變形され得るものである。けれども人間社會に主として威制するものは、寧ろ心的環境若くは社會心であるから、そこで人間社會を改造する捷徑は、先づ人々の特に幼い人々の、理智的要素たる觀念や標準や並に價值等を巧妙に取扱ふて、其の社會的態度を有利に變化させるの外はない。

即ち社會的に有利な方向に合理的に指導し且つ統制することは、之れ云ふまでもなく社會の習性や慣習や制度や並に態度やの全體の變化を誘導し得る所以であつて、此の様な變化の可能性に到底限界を附することは可能ぬ。云はゞそれは何時までも々々々々々々限りなく變化し得る可能性を持つてゐるものであるから、生中なまなかに固陋無知な政府當局者などが、之れを制限しようとするのは、却つて人間性を賊し且つ社會の進運を阻止するものでなければならぬ。

ギツヂングスも云つてゐるやうに、今や文化は正しく到來しつつある。斯くの如き文化の行程が、一たび心理學的並に社會學的の原則を理解する者によりて合理的に指導せらるるやうにでも

なれば、按ふに現代社會の進歩は更に一層の速度を以て確に其の最善の目標に達し得るであらうが、其れが今日のやうに未だに物質力と法律力とが優位を占め、斯くて理性と徳性とが其の下に威壓されてゐる社會では、其れは到底期待さるべくもない。

で、今日の急務は何を差措いても教育の普及化と深刻化を圖ることであらなければならぬ。教育の社會的機能は洵に重大であつて、即ち其れは一方に於ては過去の社會的業績や傳統や習性やを蓄積し保存し而して淘汰し精選すると同時に、他方に於ては新しい時代に適應する新しい業績や傳統や習性やを助成し哺育し而して創造するの力があるから、苟も健全な社會改造を圖らうとならば、开は職として教育を通じて仕遂けられたものでなければならぬ。而して社會心理説は此の方面に於ける教育の職能を特に重要視するものである。

四、社會の分類

A。話は少し前に戻るが、曩に「少くとも二人以上の人々が一す會合して何等かの交渉をしてゐる」のも社會なら、或は「數百年乃至數千年以來共通の文化的要素を有する一民族乃至一國民

も社會なら、復た或はもつと大きく云ふて苟も何程かの共通生活若くは共通感興を持つた全人類」も等しく社會であると云はれたやうだが、其のことに就いては今だに少々不審の點が残つてゐる次第だから、茲で改めて質問をする。

既に社會を定義して「心的に相互作用する人々の一切集團」若くは「多少なり意識的に交互關係を有する人々の一切集團」とする限り、吾々には上の三つの場合が、果して此の定義に一樣に當て筈まり得るか、素人の悲しさには怎うも判断に苦むから、一應お説明が願ひたい。

B。成程、それは御尤もかも知れぬ。が、其れは要するに世俗的の物質的見界に君が依然囚はれてゐる結果だ。さうして、少數とか多數とか、復た一時的とか永久的など云ふ觀念に矢鱈に拘泥してゐる結果に外ならない。固より數とか時間とかの力は、社會學上で非常に重大な要件には違ひないけれども、然し其れは社會そのものの (an sich) 本質を、平面的に觀察するには何も關係はないことだ。さうして、總ゆる社會現象を包括するやうな社會的事實の極めて純真な且つ根本的な部分を一切社會の單位と定め、之れを定義すれば宜しいのだ。

「國家と個人」の著者ダヴルユー・エス・マツケクニーも云つてゐるやうに、蓋し總ゆる生物は生

長し而して變化するものであるから其の定義は須らく包括的でなければならぬ、復た其の幼芽と並に其れが完全に發達した類型とを、悉く包容するものでなければならぬからである。

試みに「民族」若くは「國民」を例に採りて云ふと、其れは確に幾百年乃至幾千年の歲月を経て發達した幾百萬若くは幾千萬人の人々を包有するものに相違ない。けれども其の歲月若くは其の人数は必ずしも社會の定義には必要でない。互に何等かの共通生活を持つてゐる全人類の場合でも同様に然うであつて、要するに社會の根本性質は相互に精神的關係を持つた人々の集團であるから、従つて此の様な特質を聊かたりとも持つてゐるものは、總て社會てう名目中に屬するものでなければならぬ。勿論其れには時間的の制限もなければ、人数の制限——互に心的關係を爲し得る二人以上でさへあれば——もなく、將た又心關係の程度にも制限はない。

けれども斯くの如き定義は之れ云ふまでもなく、現實の社會が其の持續に就ては時間的に、成員については數的に、而して心的の關係に就ては多いと少いとに於て、幾多の種類あることを明かに豫示するものであつて、固より現實の諸社會には一つとして時間的、數的乃至結束的——即ち心的關係の——の制限を受けないものはないが、然し其等は社會としては寧ろ第二義的のもの

であるから、必ずしも社會の定義中に包括せしむる必要はない。

社會の神髓は徹頭徹尾人々——二人以上——が精神的若くは意識的に相關係する點にある。是れは實に總ゆる種類の社會の本質であり復たエムブリオ(胚胎)でもあつて、其れが生長して様々な大きさと内容と且つ構造とを持つた諸社會となるのである。

此の點から觀ると、ブラツクマー並にギリン兩氏も云つてゐるやうに、社會てう名辭には一般的的と特殊との二範疇に屬する意義があつて、其の一つは總ゆる種類の社會に最も多く共通した方面たる、云はゞ何れの社會にも缺ぐべからざる屬性を表示し、他はそれらに或特殊な點では異つてゐるが、而も同様に此の社會といふ一般的名辭には包括さるべき種々な體制が、別に存すべきであるといふことを暗示する。言葉を換へて云ふと、前者は或種の社會的感興の上に立つてゐる總ゆる種類の集團を意味し、後者は例へば何々社會と云ふやうに何か一つの形容詞を心に思ひ浮べて、初めて明確な觀念を表はし得るものである。更に切言すれば、前者は苟も「心的の相互關係を持つた人々の集團」であれば、何れにも通用し得る一般的名稱であるに反し、後者は例へば日本人社會とか支那人社會など云ふやうな、それらに特有な意味と内容とを持つた

特殊のものであることを知らなければならぬ。

A。それで漸く解つた。して見ると、特殊な社會には當然色々な種類がなければならぬ筈だね。一般人は何等の反省もなしに唯だ漠然と非科學的に、兩者を混同して云つてゐるから、何時も混亂が生ずるのだ。つまり無智が生んだ結果だらう。吾々は一般的の社會といふものについては、大略ながら既に心得た譯だけれども、未だ特殊な社會の種類即ち其の種々相については何等の知る所がない。で、極めてザツとで可いから聞かせて貰いたいものだ。折角、社會を知りかけても、此の儘では所謂九仞の功とかを一簣に缺ぐ次第だからね。

B。從來社會學者の中にも、社會の分類といふことについては多く閑却し、其のために折角の社會理論を少からず曖昧不徹底に終らしめてゐる人々が少くないから、是れは確に必要なことに違ひない。従つて君が之れを知つて置きたいと云はれるのは、洵に當を得たことだ。で、それを左に説明することにしよう。

だが唯だ茲でお断りして置きたいのは、是れから吾々は残された餘白の中で、「家族のこと」と「國家のこと」並に「個人と社會との關係」、而して最後に「社會生活の意義」に就いて、是非と

も論究しなければならぬ。其れが不可能ならば少くとも一言だけはしなければならぬと思ふが、所で今から社會の分類などを割合に詳しく述べてゐては逆も間尺（さし）に合はぬから、茲で述べてゐることだけで不足を感じる讀者があるならば、其れは拙著「最新社會學講話」を参照されたいの一事だ。

社會の分類についても生物學的の分類もあれば心理學的のものもある、さうして前者にはスペンサーを初め、デュルケームやアルフレッド・ファイエーやタルドや並にウヲルム等の學者が屬し、後者にもグムプロキツチやロツスやコルネゾやジムメルやクレーレーやエルウツドや並にギツヂングス等の更に數多くの學者も控えてゐるから、之れを一人々々論究してゐた場合には、其れだけでも隨に一冊の浩瀚な成書が出来る位だ。

で、茲では右の中でも學問上比較的に妥當と思はれるギツヂングス氏の分類だけを述べて、他は省略することにする。想ふに社會學者にとつて最も肝要な分類は心理學的特質に基づく社會の分類であつて、其の中で最も本源的なものは、社會を本能的と理性的との二種の社會に大別することであらう。

即ち下等動物たる虫群や鳥群や而して獸群やが、一緒に生活したり協力したりするのは、元來本能によりて結合してゐるものであつて、彼等は決して團體の効力を理性的に理解してゐるのではない。言ひ換へると、刺戟に對する彼等の類反應や模倣行動や、並に彼等の間に屢々發現する威壓や服従やの現象は、全く純然たる本能に屬するもの。あるから、固より之を理性的とは稱することが可能ぬ。

然るに之れに反して、人間の社會的關係は決して斯くの如く簡單なものではなく、縦ひ如何ほどに下等な人間社會の刺戟に對する本能的の類反應でも、尙ほ其れは少くとも幾部分かは團體の効力を理性的に諒解してゐるものである。然し本能とか若くは理性など云ふた所で、通例、兩者はそれ〴〵に幾多の程度で混和されて存するものであるから、従つて或一定の社會に存する本能と理性との特有な混和は、即ち刺戟に對する其の社會の類反應の様式と同類意識とを決定し、斯くて其のために又個々人の精神と精神との關係の主なる様式をも決定しないものでない。

而して精神と精神との關係の此の様な主たる様式は、即ち復た其の一定社會の主なる社會的結束でもあつて、其れは實に心理學的基礎の上で一切の社會を分類しようとする者の最も恰好な標準ともなるものでなければならぬと言ふて、ギツチングスは一般社會を大別して、主として本能の上に立つ動物社會と、主として理性の上に立つ人間社會となし、後者を更に八種に細別してゐる。

A。序にと云ふては甚だ相濟まぬ譯だが、其の八種とやらの社會の分類が承りたいものだ。大略で宜しいと初めは云ふたものの、是れだけでは何だか物足らぬ氣がする。若し餘白が足りなければ後のことは省略されても大抵で我慢をする、頼む。

B。では、後のことは餘り顧慮しないで、セメテギツチングス氏の八分類だけでも、お望みに任せ説明することにしよう。即ち彼れは社會的結束を標準として社會を左の八種に類別してゐる。

(一)、幼少時分から共通した環境若くは類似の環境に置かれ、其の上に遺傳と經驗とを同じうする人々から組成されてゐる血族關係ヨムニユニチの同質的な部ヨムニユニチ落がある。そして其の諸成員は何時も自分々々で親族であるといふ意識を持つてゐるから、彼等の主なる社會的結束は云ふまでもなく同情である。それで、此の様な親族の一團から成立つてゐる社會の種類或は類型カインフは同情的シムパシクと稱するの

外はない。

(二)、復た多くの場合、非常に離れた地方々々から集合して来た、即ち云ふて見ると元來は互に全くの他人ではあるけれども、一種の信仰とか教義などに對する共通的な反應から、或は又娛樂とか何等かの改良を企てようなどの機會に對する共通的反應から、寄り集まつてゐる云はゞ同じ精神を持つた人々から組成されてゐる部落がある。

即ち千六百二十年「メーフラワー」號で北米に渡航し、そしてマサツセツ州にブリトウス植民地を建設した一隊の人々であるとか、或はモルモン宗一派の人々の如うな宗教的の植民地であるとか、復たミツソリー州やカンサス地方の「ニュー・イングランド」植民地の如うな政黨的の色彩を持つた植民地であるとか、更にイカリアの如うな共通主義的の友愛團などは皆な此の種の社會に屬するものであらう。云はゞ、性質が似てゐるとか、思想が一致してゐるとか云ふことが、此の種の社會的結束となつてゐるから、恚うして建設せられた社會の種類は正に同趣味の社會と呼んで然るべきものだ。

(三)、それから經濟上の利害關係から寄り合つた雑多な或は往々にして不規則な諸要素から成

立つてゐる部落がある。其の一例を挙げると、國境植民地であるとか家畜牧場であるとか、或は探礦のために野宿をしてゐる連中の如きもの等を云ふのである。

本來から云ふと是等の部落では最初新來者は餘り歡迎もされないが、それかと云つて全然拒まるるでもなく、云はゞ一種の試補の格で此の部落に這入つて来て、實際の仲間入りに及第の可能るまでには、全く先住者達の默認で暫く彼等の間に逗留することを得るのである。それで人々の性質とか品行とかを一般が認容することが、即ち此の部落の唯一の社會的結束となつてゐるのであるから、従つて此の種の社會を假りに認容的と呼んで置く譯だ。以上挙げた三種の社會は皆な自發的に形成された單純な集團であつて、就中初めの二つだけは同質的で、一般に互に孤立した環境の中に置かれてゐるを常とする。さうして第三のものは異質的であつて、其の存在は多くの場合一時的なものではあるが、而も其の期間に於てすら、往々にして經濟上絶好の機會を捕へ得ることがある。

其の他の五種の社會は、半ば人爲的若くは意識的に熟慮された結果、出來上がったものであつて、概して云ふと征服とか聯合などで出來た複合的な社會であるから、其の性質は勿論異質的た

るを通例とする。そして其の環境は割合に豊かで且つ様々に分化してゐるのが認められる。

(四)、第四種の社會を組成する人々は、其の能力に於て甚しく相違してゐるのが見られるのであつて、云はゞ強者と弱者、勇者と臆病者、乃至は雇主と被傭人等から成立つてゐること、恰も征服者と被征服者の如うな觀を呈してゐる。而して此の種の社會の社會的結束は、威壓力と畏怖的服従とであるから、其の社會的類型は云ふまでもなく壓制的である。

(五)、第五種の社會では專斷力が久しい間行はれてゐて、今では全く傳統若くは宗教と同一視されるほどになり、復た天賦の神權と是認せらるるほどの權威ともなつてゐるのであるから、權威に對する尊敬の念が即ち此の社會の結束である。で、其の社會的類型は權威的とすべきであらう。

(六)、第六種の社會は伊太利に於ける諸都が一番悪い状態に在つた時代の如うに、從來存在した社會的秩序を失ふた民衆の間に發生するものであつて、放縱な投機者が現はれて賄賂やら恩恵やら若くは其他の昇進などを餌にして私人的の主従關係を作るのである。それで其の社會的結束は陰謀と徒黨とであるから、従つて其の社會的類型は朋黨的と稱する外はない。

(七)、第七の社會は合意により相談的に作られたものであつて、此の場合には明かに團結の効力が人々に認められ、且つ一般の安寧幸福を増進するために協力の契約が結ばれてゐるものである。例へばアキアン聯盟 the Achaean League であるとか或はイロコアス聯盟であるとか、乃至は千七百七十八年に於ける亞米利加共和國の聯合であるとか、皆な是れに屬すべきものであつて、此の種の社會の社會的結束は契約若くは協約であるから、其れの社會類型は契約的と云はなければならぬ。

(八)、第八種の社會は人々が集合的に或種の一大理想を抱くようになり、斯くして力を協せて之れを實現しようと努力する場合に存在するものであるから、即ち心と心の理解、信賴、誠實並に社會奉仕の愛他的精神は、其の社會的結束をなすものでなければならぬ。で、此の種の社會類型は宜しく理想的と稱して然るべきであらう。

而して是等八種の社會的類型中で、其の發達の階段が一層高く且つ複雑な社會は、概して其の組成的集團中に下級な社會的類型をも包括するを常とするものである。

五、家族生活の變遷

A。家族とは云はゞ男と女と小供との小さな集團であり、且つ様々な社會組織の中でも、是ればかりは何處でも餘り變りのないものであるとの理由で、從來は往々社會の單位であるとさへ見做されたほどであるが、既に社會生活を以て人間の本能的若くは生得的のものとする限り、人間は又生得的本能的に家族生活を營むべく作られたものとも云へる譯である。事實、其の様に解釋しても差支えなきや。若し然うとすれば、家族生活は一體何のために發生したのであらうか、其れを承りたい。

B。家族を以て社會の單位とすることが、一種の俗見に過ぎないことは、君の既に了知する所であらうと思ふから茲では贅せない。が、家族は確に社會と同時に發生したるものには違ひない。けれども其れが果して何時何のために發生したかを決定することはナカクに難かしい。極めて劣等な人類の中にも或は猿猴類の間にすらも、或種の家族關係は確に存在するからして察すれば其れは少くとも一切の高等動物には最初から宿命的のものであつたとも思はれる。而已ならず或

種の鳥類や並に其他の高等な哺乳動物等の中にも、亦多少なり家族生活に類したものが存在するよりして考ふれば、疑ひもなく家族生活は兩親が協力して幻兒を哺育するために自然淘汰の結果自ら設定され且つ持續するようになったものに相違ない。

さうして其れは他の總ゆる社會制度と同様に、徐々と且つ不規則に進化して來たのであつて、按ふに最初の男女關係が一種の雜婚状態にあつたことは、現今では之れを徵すべき何等歴史上の記録も、若くは人種も残つてはゐないにせよ、兎に角之れを推定するに決して難くないと云ふのは、此の様な状態に最も近寄つた云はゞ不定期の結婚即ち偶婚とも稱すべき状態にある人種が、今日でも其の數決して少くないからであつて、斯くの如き境遇の下では、家族關係は總じて一時的若くは不定的たる免れない。

然るに一切の未開部族の家族に於ける兩性關係が、多く不規律であつて且つダラシのないのは一面に於ては固より彼等の強烈な情緒に基因するものに違ひないが、他面に於ては確に性的關係に對する彼等の自覺と經驗とが足りないことを立證するものでなければならぬ。けれども亦見やうに儼りては斯くの如きは即ち性的關係の本能的統制から、漸次に開發する理性的の統制へと移

る過渡期にあるものとも言へば云ひ得るであらう。

家族生活の中心觀念が兒童の養育にある以上、其の様式が社會組織の諸事情に依りて、何時も變形されることは固より云ふまでもないことであつて、即ち人間社會が發達するに従ひ、家族の構成基調たる結婚制度も亦種々と變化し、斯くて現今の文明社會に見るやうな、一夫一婦制家族が遂に發生するに至つたのである。そこで家族生活進化の程度は、即ち其の社會の文野を測る指標であるとさへ、一部の人々には考へられてゐるほどに、其れは社會の發達にとつて洵に重大なるものであることを知らなければならぬ。

A。いかにも家族様式は社會の發達と不可分的な關係を有するものに違ひない。即ち現今多くの文明社會に存すやうな父家長的家族と相並んで、現代否な少くとも從來の文明が兎角男子を本位として發達して來たことは隠れもない事實であつて、一部の人は今日の資本主義さへも、多くは其の複產物であると主張したほどである。所で此の様な状態は人類の開闢以來から存在したものであらうか。

B。現在が父家長であるから過去も亦左様であり、特に體力を以て社會的優位を占むる唯一の

要件とした最初の原始社會に於ては、尙更ら左様であつたらうとは何人も考ふる所であり、此の事は單り一般人ばかりでなく、千八百六十一年獨逸の法律學者バホーフエンが其の名著「母權」(Das Mutterrecht)を公にして、人間社會の初期は男子よりも寧ろ女子によりて支配されたと云ふことを發表したまでと云ふものは、専門の學者仲間にも同様に信せられて居つたのである。然るにバホーフエンの研究は千八百七十六年マクレンナンによりて補充され、次いで翌年には更にモルガンによりて支持されるようになって以來、漸く學界の承認する所となり、斯くて從來の傳説は全く轉覆されるに至つたのである。特にモルガンは其の結論の基礎を、主として多年間に互る亞米利加印度人の直接研究の上に置いたのであるから、其の論據の確實なるは固より云ふまでもないが、然しマクレンナンといひモルガンといひ、母家長制の存在を論證する點に於ては共にバホーフエンほどには熱心でなかつた。

：は云ふものの、彼等が提示してゐる一切の論證は、却つて母家長制とは酷しく類を異にした母系制、即ち母方を通した血統制が、初期社會に行はれたことを證示してゐるのであつて、多くの原始民族中には、未だ會つて父家長制なるものの存在した例なく、縦し存在したことがあるに

もせよ、其の以前既に母方を通した血族制が行はれて居つたといふことは、今日學者の普く一致する所である。で、斯う云ふ場合の家族生活を云ひ表はすには、母家長制なる用語よりは却つて母系制なる語が一層好ましい。

即ち此の様な家族では兒は今日の父系制家族の如うに、父方の親族には屬さないで、却つて母方の親族に屬する。が、之れに反し家族の支配權は必ずしも母の手には存しないで、却つて母方の男の親族の手に握られるのである。——尤も社會一般の事柄に關する女子の權力は之れを今日父の家長的家族時代に比すれば遙に優つてはゐるが。

斯う云ふ家族制の後を承けて現はれたのが、即ち父を通して兒の血統を辿り、又父方の血統を辿ふ所謂父系制の家族であり、其の後に到りて初めて父家長制は發達したのである。我國などで云ふても、神代は多く雜婚が行はれ、從つて母系制は其の當時を貫く大きな時代相であつて、天照大神の如きも即ち當時の族長に外ならなかつた。

A。成程、それは面白い見方だ。所で、最初に母系制が起りて其れが父系制並に父家長制に移るには、何等かの原因がなければならぬと思ふ。其の邊の消息が承りたいものだ。

B。最初に母系制を生ぜしめた理由を、モルガンは原始民族の間に行はれた雜婚に歸し、アラツクマー並にギリンの如きは、必ずしも左様ではないとして父親よりも母親の方が遙に認知し易いからだと言張してゐるが、少くとも母系制の最初期に於ては、雜婚が行はれてゐたからこそ認知の問題も起つたのであるから、モルガンの説は必ずしも排斥すべきものではなからうと思ふ。

即ち雜婚の場合では、小供は絶對的に母親一人の手に歸する外はない。其の上に長い幼年期に於ける母親に對する兒の愛着は、之れ亦母を通じて血縁を辿ることが、最も自然の成行だからである。然るに母系制の後期になると、既に同族間の雜婚時代は經過して異族結婚となつてゐる時であるから、此の場合、夫や父は自分の同族を離れて妻と同棲するために、妻の同族の居る場所——何となれば妻は依然其の同族と共に住んでゐたから——に出かけなければならぬ。所で、妻の同族は夫とは全く無關係な血縁であり、且つ其の同族中には多くの場合夫と同族のものはない筈だから、從つて血族關係を以て社會的の結束とする時代に於ては、小供を支配する權利が、全然、小供の生まれた集團の手中に落ち、且つ又其の小供を以て其の集團と同一血族であると思はされたのは、盡し當然の事柄であらう。

此の様な制度がたびたび設定されると、母を通して血縁を辿る風習は、縦へ父親が承認されるやうになつた後までも、尙ほ長く持續しようとするものであるから、苟も此の様な母系制度を打破しようとするには、更に新しい且つ力強い動因の作用することが必要であつて、狩獵期に代はる牧畜時代の發展は、即ち此の様な變化を誘發する重大な經濟的影響があつたのである。

と云ふのは、家畜群の跡を追ふために家族は他の同族から離れなければならない、其の上に獸群の見張りをするには、可能るだけ多くの勞力が望ましい譯だから、男は餘り長く家庭を留守にして出歩くことも可能ないようになり、それや是れやの關係から、何事にもせよ規律立つたことが即ち狩獵經濟の結果たる不規律に替はるようになったからであつて、之れと同時に、家畜の肉を何時でも食料に供し得ることは、復た妻といふものをして最早や食物の支給者としても、必ずしも無くてならぬものではなくならしめた譯だ。それに家畜群の番をするために男の兒の勞力といふものが一層大切となつたことも、確に一つの原因になつてゐるに違ひない。

母系制家族を碎破した更に一つの重大な要因は戰爭であつて、女子は俘虜として捕へられて男子の支配下に置かれ、戦利品であるから勿論戦捷者の所有財産であり、其の生んだ子供も同様に

彼れの有に歸したのである。此の様な仕方の少しく形を變へて現はれてゐるものは、妻を購ふこととだが、此の場合に於ても妻に對する夫の權力は、毫も捕虜の場合と異なる所はない。

而して男子の優勢が又たび確立されるや、之れを保持するために宗教が這入つて來て有力な支柱となり、斯くて母系制時代には單に女神を崇拜する外、復た何物をも認められなかつたのが父系制時代になると、祖先崇拜は男子の自我擴大を最大限度に皇張し、斯くて女子を卑むると共に、男子の有りとしある侵襲的の性向を肆まならしめたのである。

復た男の兒は經濟的見地よりしても或は勞働者とし、又或は家畜の番人として重寶がられ、社會的見地よりしても軍人として非常に大切とされたが、今は祖先の靈魂を崇めるために更に一層重寶がらるるに至つた次第だ。それで、男の子を生まない女は單に集團のために無用の長物として呪はれたばかりでなく、又神々にも憎まれたのである。不妊の女は實に呪ひの焦點であつたが女の兒ばかりを生んだ女の運命も、亦必ずしも幸福なものではなかつた。而して不貞の女が單に家族や部族の眼から見て、犯人たるばかりでなく、又神々の眼からも罪人視せられたことは、之れ全く父家長制の産兒たる祖先崇拜教の哺くんだ男子中心觀の結論に外ならぬのであつて、即ち

一方に於ては、女子特に既婚婦人の貞操を斯くして良心に植え付けつつ、他方に於ては男子のそれを殆ど全く不問に附したと云ふものは、之れ決して合理的な制度とは申されない。

女子解放を叫ぶ現代婦人の高き聲は、正しく此の様な非合理の男子中心否な寧ろ男子専制の父家長的悪傾向を、緩和するに與つて力あるものには違ひなからうけれども、然しまだくゞ低い生物的の要因が、割合に多くの勢力を占めてゐる現代社會に於て、其れが果して所期の効果を擧げ得るかは、蓋し大なる疑問であるのみならず、或は恐る却つて一種の反動的傾向をさへ誘起せしめないものでもないが、彼等は其のために決して挫折すべきでない。叫び叫び而して叫んでゐる中には、遂に男子をして理智的に覺醒せしめ、斯くして今は半身不隨となり居る現代社會をして眞に改造の第一歩を踏み出さしめるかも知れぬ。

が、男女は元來互に相補充すべきものであつて、決して同權なるべきものでない。此の點に於て、吾々は今日の所謂「新しい女」なる姉妹に、一言することなくしては已み難いのであつて凡そ世に存する有りとしあるものは一つとして補充的に價値を有せざるものはない。況んや雌雄や男女やの關係に於ては尙更ら左様であつて、それを男女同權などと得意げに叫んでゐるのも、

等しく舊式の權力説に囚はれた釋見と云はなければならぬ。其の結果は男女互に其の權力を主張し、斯くて永久に相對抗し又斯くて永久に其の歩むべからざる道を歩まなければならぬようになるであらうが、是れは決して人類の福祉を招徠する所以でない。

A。全く同感だ。婦人を今日の儘で放置して顧みないのも、實に現代文明そのものの汚辱であるが、それかと云つて現代婦人の無自覺にも愛想がつかぬ。一方には始ど全く男子の奴隸的な玩弄物を以て甘んずる餘りに暗昧過ぐる女があるかと思へば、他方には半可通な舶來の理屈を捏ね回して矢鱈に新らしがる女があり、斯くして歸着する所は、共に眞實な生活への道から落伍しようとしてゐるのであるが、是れは何とかして注意を喚ばなければならぬ。特に由々しい現代病の一つである離婚率は、世界の文明社會を通じて年々に増進しつつあるやうであるが、其の原因は一體何であらうか。

B。離婚は眞に現代社會の一大病患だ。従つて其の原因に對する諸家の見解も區々であつて必ずしも一致する所はないやうであるが、概して次ぎのやうに約説することが可能であらう。

第一は何と云つても産業革命以來、一層顯著になつた貧富の懸隔が其の原因だ。即ち一方には

辛うじて一身を糊し得る人間の數がますます増加するに反して、他方には人生の享樂に飽いた生活の無聊さを緩和しようとして、富の力で虚偽の結婚を爲さうとするものが少くないことだ。

尤も教育が割合に發達した結果として、單に金錢のみのために結婚しようとするもの數は漸次減じては來たが、それでも尙ほ家庭生活の眞の基礎として、何を差措いても先づ金錢上のことを考慮しなければならぬ結婚の數も決して少くはない。既に其の様な考慮が家庭生活の重大な基礎となつてゐる。且つ其れを持続させるための主なる理由となつてゐる限り、一たび金錢を無くした爲めか、それとも亦斯くの如き虚偽の鎖で、人生の重大な性的關係を繋ぐことの、如何に淺基であるかを泌々と感じた爲めかによつて、其の様な考慮が次第に意義を喪ひ、斯くして往々破鏡の嘆を見ようとするのは、敢て必ずしも不自然なことではない。

第二は過去五十年間に於て、女子の社會的地位に、重大な變化の到來したことが、確に離婚の原因になつてゐる。即ち經濟上の獨立てう著しい變化によつて、女子は飢餓を遁れようために、會ては涙を飲ん も男子の屈辱を忍ばなければならなかつたが、今は其の束縛から自由に身を解放し得るようになったことだ。

復た會ては傳統の力で以て、苟も家族生活に背かうとする女を、社會的に殆ど破門同様の目に遭はせ、斯くして女子にとつては何れの意味から云ふても、最早や眞の侶伴ではなく、従つて復た又何等の愛情で裏づけられることもない男子との結合を、矢鱈に法律で阻止したものだ。其れが今日では少からず弛んで來たことは、現に滅多には離縁が許されない回々教諸國や歐洲諸國などですら、離縁以外に好ましくない夫の手から離れ得る方法が、他に幾らもある證據が澤山に擧がつてゐるのを以ても、其の一般が知られるであらう。

然るに女子の精神が其の様な捨鉢的な氣分にはなれないとなると、彼等はドコまでも愛なき生涯を悶え通し苦み通して、一生を尊敬も將た愛情をも捧げることの不可能な男のために、棒に振らならなければぬ。古い傳統は弛んだとは云ふものの、未だ全く廢れた譯でもないから、今日尙ほ自分の親兄弟や親類や並に友達やの意見のために、或は世間の口や法律の制裁やのために、又或は生んだ小供のために、人知れず泣きながら辛抱してゐる婦人が、其の數決して少くはないである。

が、女子の産業上の解放と同時に、離縁に對しても大きな衝動が與へられた。即ち一方に於て

は離婚を非難する社會傳統が漸く癢れかけたと共に、他方に於ては結婚を取極める一層優れた方法が見付からないために、離縁率は今後増々増大するものと見ねばならぬ。其の上に、女子教育の發達に伴れ、女子が男子に對する自分の關係問題を考へるようになって來たことも離縁の非常な潜在力だ。何となれば、女子が考へ始めるようになると、傳統力は破れ始めるからだ。

第三は女子の精神的解放が離婚の重大な要因となつてゐることだ。即ち性の眼醒めた辨別力は古い慣例を疑ひ出し、其の疑ひが旋がて多くの女をして實際は解決する準備さへも出來てゐない幾多の問題を、提起せしめたのも固より怪むに足らぬ事柄であつて、此の様な時代精神の結果として、我國などでも昨今は女子が英國や亞米利加などに倣ひ、參政権を獲得しようとする運動さへ起してゐるほどであるから、況んや一たび結ばば又解くことも不可能ないと云ふやうな、非合理的な結婚契約の傳統的慣例に對し、女子が段々尊重の念を薄らけて斯くて離婚を増加せしめて來るのも、固より當然のことと云はなければならぬ。

要するに自分達の運命が、今後増々悪くなるばかりだと氣づくようになつたことが、昨今流行してゐる女子解放運動の主なる動機となつてゐるものに違ひない。元來、政治上に於ける責任の

分擔などは、必ずしも女子の渴望してゐる緊切な要求ではないので、彼等は最も痛切に、家庭内の束縛を感じ、従つて忌々しく感じてゐる其の様な系縛から、解放されることを最も切實に願望してゐるから、其れを政治的に得ようとするに外ならぬのだ。が、實際、今日の婦人解放運動者は一切の社會改造論者と同様に、餘り行き過ぎてゐる傾向ないでもない。我國などでは未だ其れ程まで極端には行つてゐないが、其れが若し昂じて婦人の美德を傷けるやうにでもなれば、其れは却つて彼等自らの社會的地位を一層墮落させるものでなければならぬ。

第四の離婚理由は、配偶を選択する仕方の非合理的な點にある。今日一般の配偶選擇法なるものが、如何に不合理な仕方で行はれてゐるかを一たび考へて見ると、其の中の十組中の僅に一組ぐらゐるが、離縁の訴訟沙汰で終るのは、寧ろ其の數の甚だ少いのを怪まれるほどだ。戀愛を取扱ふてゐる現代小説に反射されてゐる現代思想には、凡そ二つの理論が行はれてゐて、其の孰れもが結婚を以て天運に任すべきもの、即ち自然と稱する因縁的な然し尙ほ幾らかは人間的な或者によりて、人々相互に豫定されたものとする點に於ては一つである。

即ち孰れも形而上學的で且つ非科學的である點に於て變りはない。琴瑟相和する底の夫婦間

に、一體如何なる種類と程度の牽引力が存するものであるかは、從來の所ろ未だ科學的に研究されたことはないが、按ふに性的引力は確に半ばは物質的の基礎の上に立つてゐるものに相違ない一般に人々は恰も磁石の積極と消極との如うに、互に似てゐない不同である即ち補足的の肉體的特質を持つた者が、互に引き付けると信ぜられてゐる。白色と黒色と纖弱なものと頑強なものと、斯くして互に相引き合ふのである。然るに一部の社會學者は之れに反して、人々の經驗の新奇なものが引きつけるのであると考へてゐるが、之れに對し更に他の人々は、一切の社會は其の精神的發達と文化との程度に應じて、それらに人間美に關する理想を形造つてゐると主張してゐる。けれど此の問題は尙ほ一層綿密に科學的に研究するを要するものであらう。

確に或種の精神的並に社會的の性質が、選擇に影響することは云ふまでもない。爰に再び非類似者間の引力論を持ち出す譯だが、補充的の氣質は能く互に引きつけると此の論の支持者は言ふ。其の様なことは確にあり得る。之れを心理學上から云ふても、少しばかり（無論餘り多くではない）新奇な精神上の特質が、他の注意を喚起して其の感興を刺戟し、斯くして次第に戀愛を發展せしむることは、確に有り得ることであつて、吾々の各々は多分幾多精神的特質に關する一

つの標準を持つてゐるのかも測られぬ。がだ、其れの構成諸要素は一體何々であるか、又是等の諸要素は怎うして選擇せられて一つの理想に組織されるか、未だ充分に研究せられてゐない。

が、此の點に就いて大切なことは、本來、配偶者の選定なるものは、本能的否な少くとも非理性的な基礎の上で行はれると云ふ一事であつて、換言すれば、人々は單に好きだからと云ふて、其の配偶者を選ぶ點である。勿論、其の場合でも或種の肉體的及び精神的の特質が、愛人の理想の中に這入つて來ることは云ふまでもないが、然し是等の特質を審かに分析して、其れと將來二人が作らうとしてゐる家庭、並に家族の諸事情とを、關係せしめて研究する人が果して幾人あるであらうか。尙ほ更に、小供が出來た後で父となり母となる上に缺ぐべからざる資格を、充分に具備してゐるかを考慮に入れる人が、果して幾人あるであらうか。

さうして多くは夢の如うに消え易い皮想的の幻影のみに、即ち其の或者は單なる顔貌のみに、或者は單なる社會的の位地のみに、復た或者は財産のみに眩惑されて、無分別にも偕老同穴とやらの好侶伴者を選定するのであるけれども、斯くては幻影一たび破れて直に現實の曝露——即ち離婚——を見ないのが、寧ろ不自然なのではあるまいか。

六、國家の發達

A。普通、吾々は社會と國家とを同一視してゐて何等の區別をも設けないが、社會に關する前のお説で見ると、國家は社會の一種であるやうにも思はれ、復た寧ろ社會が國家の一部であるやうにも考へられる。言葉を換へて云ふと、即ち國家の中には幾多の社會が包括されてゐるやうにも考へられる。それと云ふのも、一つは國家に關する吾々の智識が全く成つてゐないからだ。で最初は先づ國家の性質が一體^ど云ふものであるかを説明して貰ひたい。

B。國家は元來共通の利福を達成するために、人々の生活が政治的に組織されたものであつて、端的に云ふと、其れは社會生活の一方面である政治生活の發現したものに外ならぬ。従つて其の目的が人々の集團、並に附隨的には人々の個々をも、防禦し保護するにあるは云ふまでもなからう。

即ち國家は全體對し互に有機的關係を有する人々並に人々の諸集團を代表し、且つ是等の人々並に人々の諸集團の關係を、規定し取締まることを其の目的とするものであるから、従つて

是等の一切集團を保存することが、國家の最も一般的な動機であり、云はゞ之れあるがために個人生活並に集團生活を規定し、整理しようとする其の政治的機能が發生するものでなければならぬ。

國家の其の様な特質は、原始社會に於ても、亦一層發達した文明社會に於ても、國家てふ全體の取締若くは規定は、一體何が故に此の種の目的を増進するための其等のみに限定されてゐるかを解説してゐるものであつて、是等の規定若くは取締は、社會發達の程度如何によりて、其の範圍に於ても亦其の峻嚴さに於ても等しく異なるものである。即ち戰爭とか飢饉とか或は疫病などの如うなものが發生してゐる時期に於ては、其他の時期よりも勢ひ一層嚴格に個人又は集團を取締まる方が、政府當局者にとつて都合の好いことであり、復た社會進化の或時期に於ては、平常なれば寧ろ風習の制裁や個人の感興やに任せて置いた方が宜しいやうな事件にまでも、政府當局者の取締の手を擴げる場合がないでもない。

それで、國家の根本特質に關しても學者に依り、それぐゝに見解を異にしてゐるのであつて、ブルンツリーの如きは之れを次ぎの様に七つの特質に別ち、即ち(一)人民の數、(二)一定の領地

(三)統一體、(四)支配者と臣民との區別、(五)有機的特質、(六)國家は道德的並に心靈的有機體であつて、人格を有す、(七)國家は教會の女性的なるに對し男性的である、となしてゐるが、之れに反し、ウイロビーは(一)社會的に結合した人々の共同生活體、(二)政府と呼ばれ並に行政官と稱された官吏の一團によりて管理された政治的の機構、(三)此の様な公的權力の範圍を決する成文若くは不成文の規則若くは準則の一體、並に其の行使の仕方、と云ふてゐるのである。

國家と政府とはドコまでも區別すべきものであつて、政府は云はゞ國家が自らを發現する所以の機關であり、復た公衆の意志若くは判斷を實行する所以の機關でもあつて、政府は共產的であるにもせよ、族長的であるにもせよ、或は君主的であるにもせよ、又或は民衆的であるにもせよ其れは要するに何時も國家の權力を表示する單なる様式たるに過ぎない。

が、政治學者バルゼスに倣ふてギチングスが指摘してゐるやうに、政體の背後にある國家と、政體の中に現はれてゐる國家とは、區別しなければならぬ。前者は、云はゞ、共通の言語を話し又正邪の道德原理について、共通の觀念を持つた一定の地域に住する人々から成り、後者は或仕方にて自らを表現しようとし、又自らを活動させたいために或權力を、限定して委任しようとする人々を指すのであるから、兩者は全く別のものである。

で、一般に政府と呼んでゐるのは即ち後者のことであつて、是れは全く政治學の題目である。之れに反して、前者は普通の意味での社會そのものであるから、之れは勿論社會學の題目でなければならぬ。従つて前者の意味で云ふた國家は、全く社會と同一である否な社會そのものでなければならぬけれども、而も之れを特に國家と稱してゐる所以のものは、其の内容が全部、後者の意味を有する國家たる政府によりて包括されてゐるからであつて、後者の意味の國家を社會學上から説明すると、ハーバート・スペンサーが云つてゐるやうに、之れは全く社會の組織要素の一つである取締並に保護を、其の機能とする一機關に過ぎないのである。

A。それで社會と國家との區別は少しは解つて來た。一口に云ふと、普通、國家と言はれてゐる中にも、其の一つは全く社會と同一内容を有するもの、即ち社會そのものを意味し、他は社會の統制若くは保護機關に過ぎない政府を指してゐるのであるから、云はゞ全く違つた二つの意味に用ゐられてゐる譯だね。それでは、社會と國家とが、多くの場合混同されるのも、全く無理もないことだ。所で、此の様に異つた二つの意味が、殆ど全く同一視さるるばかりに相平行して發

達し、さうして今では全く互に相疊り合ふてゐるらしいのには、何か深い仔細がなければならぬと思ふ、お説明が願ひたい。

B。只今の御質問で見ると、君はまだく／＼肝腎な社會生活そのものの眞義が能くは解つてゐないやうだ。一體人間の生活とは如何なるものであるか。先づ其の事から君は考へ初める必要がある。吾々の生活は渾然とした統一體であるから、固より之れを切れ／＼に分割し得るものでないことは云ふまでもない。が、他の下等動物の生活と違ひ、其れは極めて複雑なものであるから、色々な要素若くは方面に分けることだけは確に可能。先づ之れを大別すれば少くとも個人的方面と社會的方面となすことが可能であらう。

而して生活の社會的方面をも更に幾つかの方面に分けることが可能なのは之れ亦云ふまでもないが、所で之れを果して幾方面に分つべきかに就いては、社會學者の間にも様々な異見があつて殆ど一定する所はない。けれども、其の中で最も妥當と思はれるのは、此の研究のみに幾十年か歲月のを費したとか云はれてゐるドウ・グレーフの分類だから、左に其れを紹介すると共に併せて卑見を述べよう。

ドウ・グレーフは社會生活の現象を自然的に分類して――

一、經濟的現象。

生産
農業的。
工業的。

消費
生産的。
不生産的。

二、種族的現象（生産者の繁殖と關聯して）。

家族。

結婚。

愛。

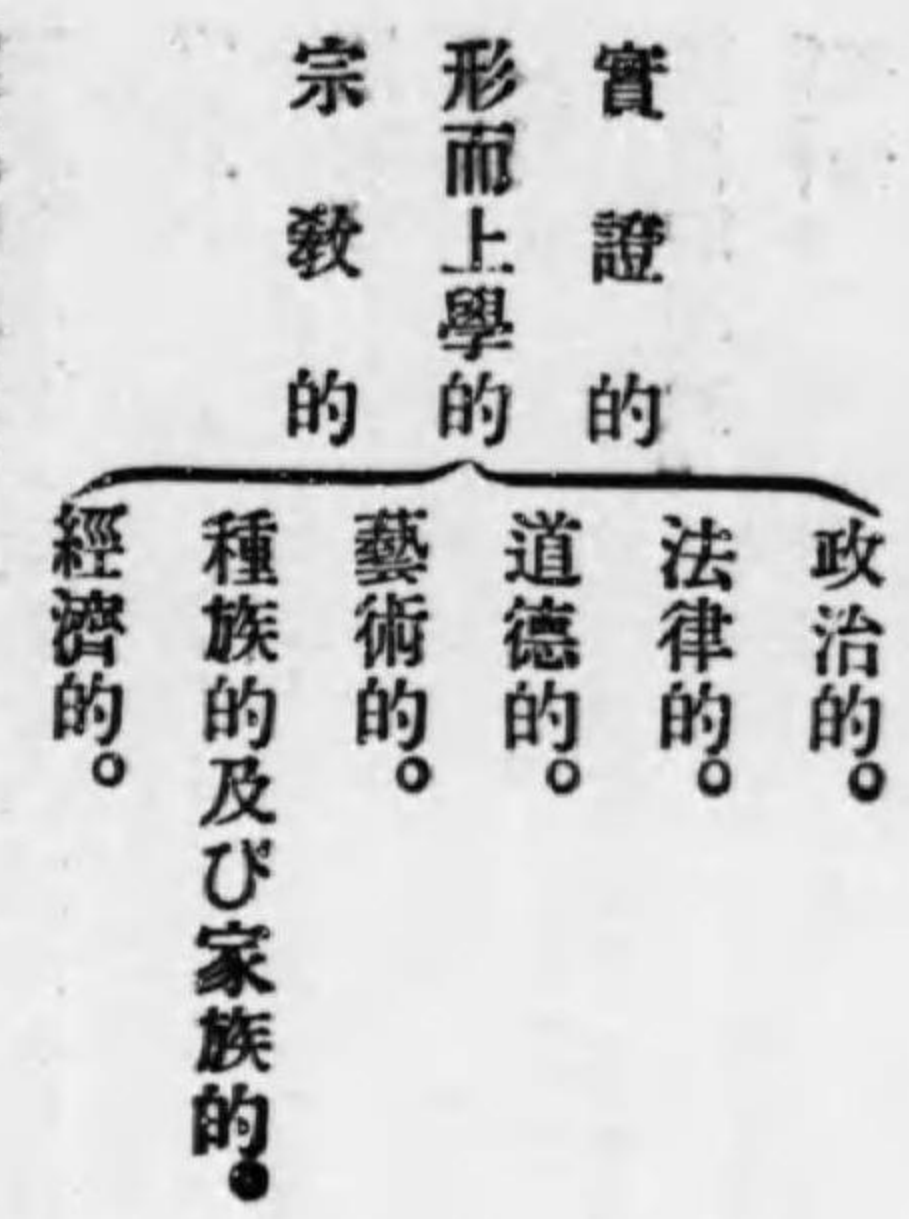
三、藝術的現象。

美術。

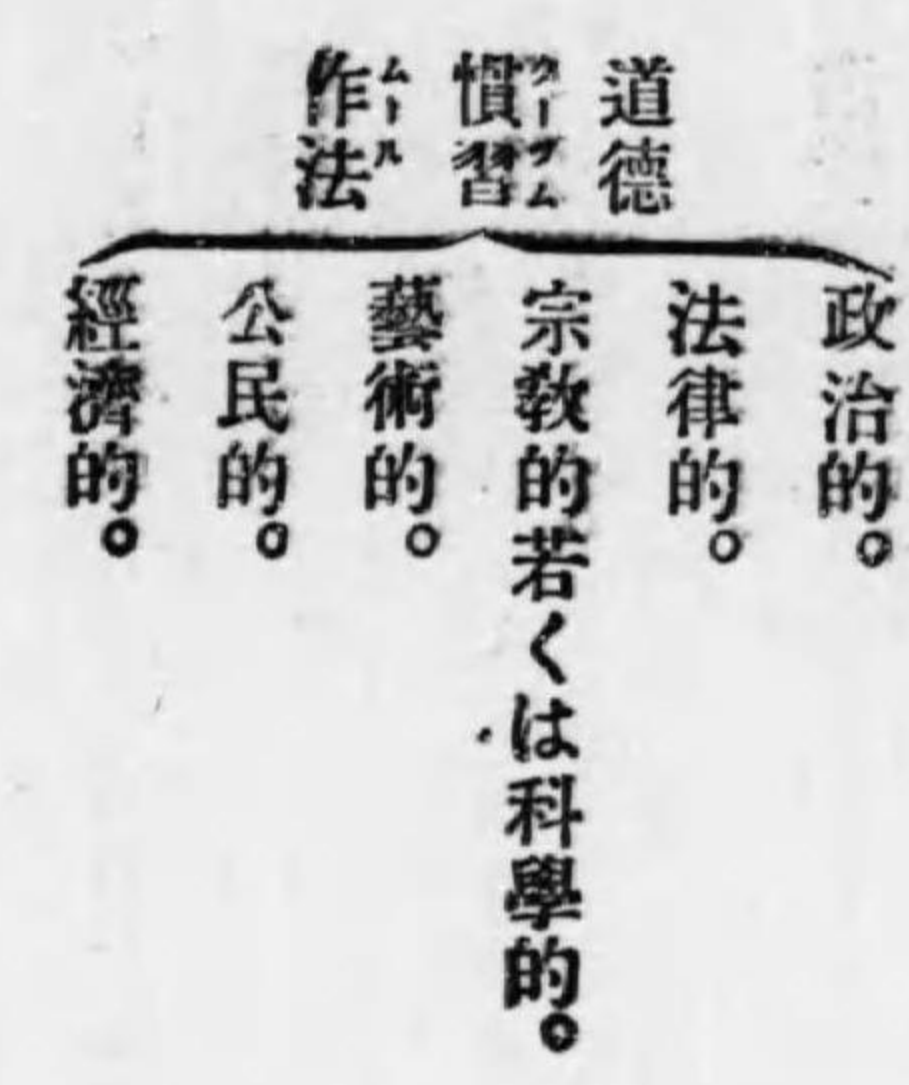
工業藝術。

國家の發達

四、信仰に關する現象。



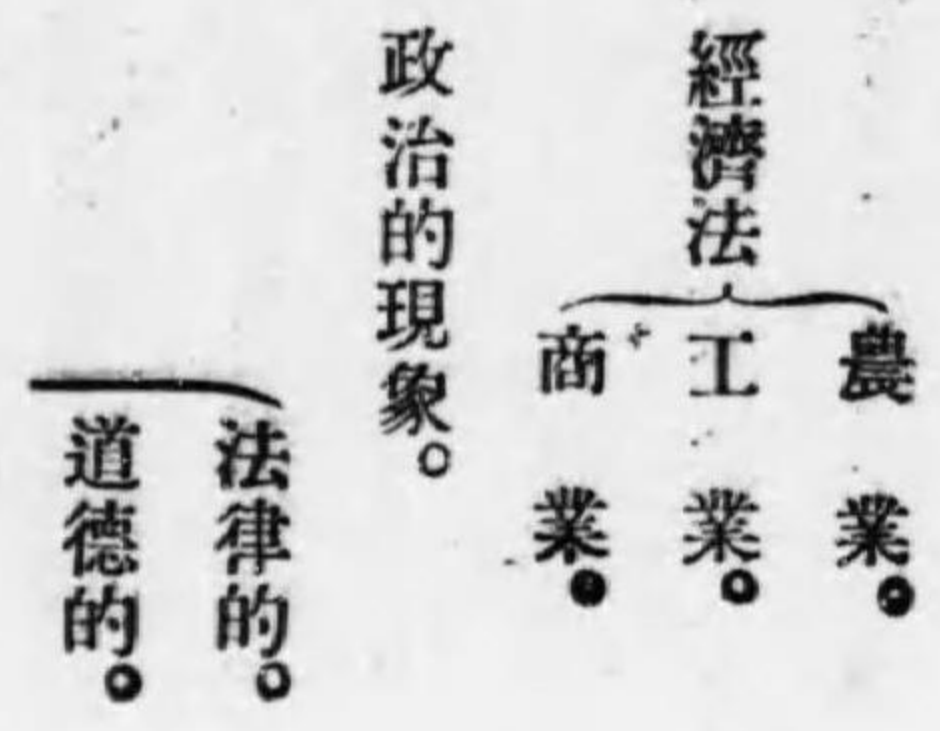
五、道德的現象。



六、法律的現象。

- 内外公法。
- 行政法。
- 刑法及道德法。
- 思想の法。
- 藝術法。
- 民法。

七、政治的現象。



國家の發達

内的政治 哲學的。
 外的政治 藝術的。

公民的。
 經濟的。

とし、且つ此の分類法は一般性 (generalité) が減少して、複雑性と特殊性 (complexité et spécificité) とが増大する順序に依りて、掲げたものであると附記してゐるのである。予輩は必ずしも此の分類法に滿幅の贅意を表するものでは決してなく、特に彼れが「教育並に遊戯」に關する重大なる社會現象を少くとも輕視してゐる點に於いては、宜しく鼓を鳴らして其の不當を責めなければならぬとさへ考へてゐるものであるが、然し大體上彼れの分類法には大に敬意を表せざるを得ない。

吾々の社會生活は斯くの如く様々な現象に分類することが可能することは既に明かであるが、擬て然らば是等の諸現象は、それ／＼に全く分離した特異なものであるか、換言すれば、彼等は互に相獨立した即ち互に全く無關係なものであるかと云ふに、其の決して然うでないことは三歳の

童子も尙ほ能く稔知する所であつて、即ち其の一例を挙げると、人々の經濟生活は一面に於ては政治にも法律生活にも道德生活にも、亦他面に於ては個人生活にも家族生活にも尙ほ況んや社會生活には勿論緊密な關係を持つてゐるものでなければならぬ。

同様に、政治生活並に其他の方面の生活を採りて之れを觀察しても、亦斯くの如く云へる譯であつて、切言すれば諸々の方面の生活現象は要するに生活そのものの一方面に過ぎないから、其の何れも他と全く分離しては到底之れを完全に解釋することは可能ないのみならず、其等の諸現象は云はゞ人々の生活てふ一つの事實を諸方面から觀察して、學問的分業の便宜上、或は之れを經濟的とし、政治的とし、法律的とし、又或は之れを倫理的とし、宗教的とし、藝術的とし、若くは其他等ともしたのに外ならない。従つて、勿論吾々の生活に最初から其の様な截然たる區劃——尙ほ況んや全く別種の生活をや——があつた譯ではないのである。

更に言葉を換へて云ふと、吾々の同一生活は或は之れを經濟的の方面から、政治的の方面から、乃至は法律的の方面から、倫理的の方面から、一様に觀察することが可能なのであつて、斯くして人類の同一生活を取扱ふために經濟學も生れ、ば政治學も現はれ、又或は其他の法

律學も倫理學も宗教學も史學も乃至は社會學も出たのであるけれども、之れがために吾々の生活が分裂したと見るべきでは決してないから、従つて多くの場合其等の學問の研究對象が、全く相疊り合ふ——勿論其の場合でも研究對象の方面は違ふが——のは固より當然のことと云はなければならぬ。

是れだけ述べたから、社會たる國家と政府たる國家とが、互に全く相重り合ふてゐる所以も亦自ら了解されたことであらうとは思ふけれども、念のため更に一言するが、社會學の論究範圍に屬する社會たる國家は、勿論政治學の研究題目たる政府たる國家と全く同一物であつて、兩者の間に内容上何等の差異もない。然るに之れを此の様に分類して觀察するのは、其の同一内容が偶々社會の一種として社會學の對象にもなれば、又政府の領域として政治學の對象ともなるからである。即ち一つの事實が、此の場合では、二つの方面から觀察され得るからである。社會と國家との關係を、尙ほ一層詳細に知らうとするには、是非とも國家の起原及び發達を知らなければならぬ。

A。是れで又漸く社會と國家との異同に關する僕の蒙が啓かれたやうだ。成程、社會といひ國家と稱するも、要は人間の生活の一部或は多くの部分の方面を指したものに外ならないのだ。——所で、又一つ爰に疑問が起つて來るが、既に自然淘汰や適者生存等進化の諸要因で以て、人々は團結の必要を知り、社會を作つて置きながら、復た候其上に國家までも組織するといふのは、餘りに御苦勞千萬な話しぢやないか、吾々には其の理由がどうも呑み込めない。

B。最も嚴密な用語上の戒心を要する科學的の質問として、君の此度の言葉使ひは少しく卑俗過ぎるやうだが、趣旨だけは解つてゐるから答辯しよう。社會を作つた上に復た候國家までも組織したなど、社會や國家やを恰も母屋や小屋やの建築でもあるやうに考へて居らるるらしいがそれが第一に間違つて居る。

と云ふのは、前でも繰返し言ふた通り、社會は決して物質的の構造物ではなく、全く心理的の相互作用に外ならない上に、國家と雖も同様に全く人々の精神的關係(特に法律的に規定された)に外ならぬものであることは——尤も古くは國家を以て一つの營造物であると主張した學者もないではないが——新國家學の權威を以て稱された獨逸ハイデルベルヒ大學教授エリネツクなども夙に唱道する所であつて見れば、社會を作つた上に更に國家を組織したなど、一見如何にも物質

的の聯想を喚び起させるやうな用語は、特に斯ういふ研學の場合には、大に心しなければならぬ君の此度の疑團を解くには、國家の起原を説明した方が、最も適切と思ふから左に其れを試みよう。

是れは拙著「最近社會學講話」でも既に述べてゐることであるから爰では唯だ簡單を期するが、國家の起原も社會の其れと同様に、本來は全く生物進化の主要要因である社會性に基因するものに相違ない。モーレーの如きは、即ち其の様に主張してゐる。勿論、國家の極めて最初の起原が其所に存することは云ふまでもないが、單に是れのみを以て國家の起原を解かうとするのは、俗も人間の祖先を以て最初のスベームにあるとなすと同じく、勿論其れは確實で且つ科學的の答辯には違ひないが、それだけでは人は到底満足すべくもないとすれば、他に如何なる説明を索むべきであるか。

ウエルソンは國家の起原を以て明確に限定された家族的訓練の中に發生したものと見做し、此の様な家族關係が發達して氏族ゼンブとなり部族トウライとなり復た民族ともなつたもののやうに見てゐるが、之れに反しコムモレスの如きは、國家を以て私有財産制度の支配を安固にしようとする幾多社會

階級間の協調の累積した連續に過ぎない、云はゞ社會の強制的な制度であるとなし、且つ曰く、父家長的家族は初めて主權即ち國家を發生させた制度であつて、女子と小供が私有財産として取扱はるるようになったのは、全く此の制度以來であつたとなしてゐる。

復たエドワード・ゼンクスが「其の政治學史」で指摘してゐるやうに、國家若くは政治的社會の起原は、之れを戰術の發達に求め得られないものでもない。何となれば之れを現代式の總ゆる國家即ち政治的共同生活體に徴しても、彼等の存在が確に其の有利な戰闘に基づいてゐることは、苟も歴史を知るものの何人も首肯し得る點であるからであつて、更にゼンクスも云ふてゐるやうに、戰闘は恰も人間社會の附物ツキモノでもあるかのやう、氏族クランと氏族との間にも、部族トウライと部族との間にも、將た村と村、町と町との間にも常に行はれ、斯くして戰敗者は次ぎ々々に合同され、遂に現代國家の端を成すに至つたものに相違ない。

して見れば、以上の諸説は何れも國家の起原の一つの要因を解説したものであつて、即ち一面より觀れば何れも眞理であると云へるが、其れには國家を以て最初から固定した一個の形態ではなく、却つて社會と同様に且つ社會と平行して、不斷に生成し進化する一つの心理的相互作用並

に其の成果であると、見做すことを唯一の條件とするものでなければならぬ。即ち國家を此の様に見做すと、上の諸説の何れもは、必ずや國家進化の顯著な何れかの段落を解説すると同時に、兼ねて又其れは國家の起原を解説してゐるものともなるであらう。蓋し社會の起原の探究は恰も人間の祖先の其れと同様に、之れを無限の太初に溯源し得るから、其の間の何れの階段を捕へて之れを社會と稱するも敢て差支はないからである。

之れを要するに、國家の起原、特に其の發端的の萌芽は、社會の起原と同時に起り、且つ同様な心理的の動機に基因するものであるが、而も國家が現代的大規模な發達を遂ぐるに至りたる所以の近因は、確に人口の急激な増加のために生活資料の支配權を増々擴張し且つ確保しようとの慾求から、頻りに戦闘を開始し斯くて今日見るような一種特有な國民的情操までをも發展させたものであるから、國家の起原は之れを人々の社會性若くは本能にあると云ふても、或は又私有財産の保護、復た或は戰術の發達にあると云ふても、敢て必ずしも不可ではない。

A。社會の政治的様式たる國家が、特段な發達を遂げて、終に今日の如うな實に一切の人々並に人々の一切の集團を、それづくに分割して包括するやうになつた理由は、大略諒解されたが、

未だ其れが怎ういふ風な過程を経て、怎う云ふ按排に發展して來たかの徑路が、能く解らぬから御教示を願ひたい。

B。先づ爰に原始的の家族、若くは幾多の原始的家族の諸集團から成立つた遊族——即ち水草を追ふて流轉する一團の人々——があると假定すると、之れは云ふまでもなく最初期の社會的集團とも稱して然るべきものだ。所で、此の様な單純な社會關係からして、既に統制の最初の端緒は自然と開かれてゐるものであつて、此の場合の個人の社會關係は勿論自分の集團内にありて、云はゞ全く同一血縁の人々若くは少くとも血縁あるものと想像されてゐる人々との關係に過ぎないが、其の様な同質的な社會的集團の中にすら、尙ほ統制の最初の芽生えはあるものであつて、其れが結局後には政治的の政府となりて發現するものである。さうして社會が母系的であつた場合には、母や其の血縁やが集團を管理するが、一たび父家長的の制度が行はれるようになると、社會の組織は非常に強固になると共に、家族も亦一層密接に統合され、治者と被治者との間は更に明確に區別され、且つ統制も非常に嚴格になるものである。

さうして、社會秩序を確立したり且つ維持したりするために、多くの場合、家族は國家の爲す

べき重要な職分を、縦へ極めて幼稚な仕方ではあつても、殆ど悉く果たしたのであつて、父家長たる首長の指導の下に、養子縁組や自然繁殖により、家族の数が殖えて遂に大きな部族に發展すると、統制の方法を一層巧妙にする必要が起り、そこで祖先以來の風習や慣例やを行つたり且つ臨時に發生する新しい事柄を取捌いたりするために、或種の規則を作る必要が起つて、彼れは法律制定者ともなつたのである。

其の上に部族的家族——其の當時は一部族が一家族を成したものだから——の諸成員間に、何等かの押着でも起ると、其れを捌くのは全く彼れの役目であつたから、そこで彼れは集團の裁判長ともなり、且つ又、集團の支配者たるべく經濟上の權力までも委任されて、今や彼れは單に神々の代表者たるのみならず、又事實女や小供やの所有者ともなつて、集團全體の共同財産を悉く委託せらるるに至つた次第だ。

後になつて、彼れの權力が他の役員達に委任せらるるようになって、——丁度、立法權が詰り部族若くは民族の首長の手から、其のために選舉された一體の人々に移つたと同様に——尙ほ初期の國家に於ける政府の司法立法並に行政の三權は、悉く家族の父長たる彼れ一人の手に委任

されたのであつて、云はゞ、有りとりある一切の權力は悉く彼れの手握られてゐたのであるから、此の場合、政治的統制の歴史的起原は確に彼れに在ると云ふても、誰か其の妄を咎め得ようぞ。而して、是等の原始的にして且つ同族的な國家組織の中に存する幾多基本的の集團は云はゞ原料となりて、之れに一定の住地や戰捷のための歸順民や、並に其他の移住民等が加はり、斯くて遂に今日のやうな組織立つた強大な國家を發展せしめたものに相違ない。

A。最初の極めて原始的な社會集團が段々に大きくなり、其れに父家長の權力も次第に擴大されて、遂に現今見る如うな國家が、發達するようになった大體の徑路は、以上でも略ほ諒解されたが、其の外には國家の形成に關して何等重要な要因とでも云ふべきものはなかつたのか。

B。勿論あつた。即ち其の一つは確に宗教^Aであつて、父家長の權力を支持するために、又は戰勝者の鐵のやうな法規を後援するために、往時の雜人種的な——此の時分には既に同族的の社會的結束は破壊されてゐたから——社會の基本を固めるに、宗教の寄與した功は決して尠少でなかつたのである。嚴格な家長或は勝利者たるの威壓さへ既に恐^こくてならぬのに、加之に宗教までも這入つて來て死んだ祖先とか或は全智全能な神様とかの、更に々々畏ろしい靈の崇^たりて以て、

恐がらせたのであるから堪まらないのだ。部族生活から國家への過渡期に、國民宗教が確立し、之れを歐洲で見ると、斯くして一二の部族の家族宗教はイスラエル國全體の國民宗教となり、復た斯くしてアリアン種の家族宗教は擴大して、遂に希臘人の國民宗教となつたのである。

國家の起原と發達とに與つて力のあつた更に重大な一つの要因は經濟力であつて、富が單なる武器や裝飾用の玉類やの外に、家畜や奴隸までも包括するようになってからと云ふものは、其等を分捕りたいばかりで戰捷は望ましいものに考へられ、斯くて勝利が遂に國家を形成する動因となつたと共に、又其れを發達させる要因ともなつたことは、世界各國の歴史が比々として之を證示してゐるのである。

國家の起原並に發達を解くべき更に一つの大切な要因は、同族者の數が殖えて集團内の接觸が頻繁となり、之れと同時に、獨立した各集團の數も増大して、其等が互に相接觸するようになるに従ひ、自然と發生したギッチングス氏の所謂「同類意識」の擴大であつて、斯くして誘起された共同生活は、漸次人々の理智的並に情調的本性にまでも温い光を投じ、それからと云ふものは、分捕品の慾求と異種族の珍らしい女子に對する慾念とは、互に手を握るようになったから、其れ

が遂に動機となりて征服や政治的の發達やを刺激したことも固より少くはなかつた。

而して同族的集團の擴大と同時に、其の集團の諸成員間に秩序や保護やの慾求が起るのは、固より當然のことであるが、所で多數の人々を取締つたり統制したり保護したりするに、爰が小供達を取扱ふやう、然う一人の力で可能るものではない。即ち社會生活が餘程複雑となつた結果として、從來の父權主義では逆も手が餘つて仕方がない所から、そこで諸々の勤務や職分やは、之れを他の人々に委任しなければならぬやうになつたのであつて、此の様な委任は政府の機能を絶えず分化せしめ、其の分化はやがて又國家形成の作用をも務めたこととなるのである。

凡て此の様な幾多の諸要因は、詰り一つの集團をして、現代式國家の發達階段の序幕とも稱すべき人種的の統合や、並に現代式政治的社會の特長たる主權やの、準備をさせるために働いたものとも云へるのであつて、米國カンサス大學のブラツクマー教授なども云ふてゐるやうに、現代式の國家を形成せしむるに至つた最も有力な動機は、遺憾ながら餘り感心したものではない——即ち其れを一口で云ふと、富の慾望と他人を支配しようとの慾望とが、混淆こまじになつた云はゞ統御慾とでも呼んで可なるものだ。

さうして血縁の絆で部族の中に鍛へ上げられ、且つ習俗や長老達の傳統やで厳しく限定された上の様な動機は、野心勃勃たる男らしい一指導者の身邊に集まつた血縁關係のない人々の、小さな幾多集團中に出口を見付けて醗酵し、斯くして戦闘を次ぎから次ぎにと起した結果、發達したものは酋長であつて、是れは實に政治の幾多機能たる支配者や裁判官や僧侶や並に資本家等の先驅者とも稱すべきものである。

更に戦争と勝利とのために第一に現はれたものは、諸民族の同化であつて、風俗習慣等に甚しい相違さへない限り、彼等は早晚合同して爰に一層發展的精神を持つた一民族が醸生さるる譯である。が、元來國家の一層大なる且つ複雑した發達といふものは、征服民族と被征服民族間の關係が親密になつて、自他共に征服民であること若くは被征服民であることを、忘れるほどに和解をするようになってこそ、初めて實現さるるものである。

復た勝利者は概して被征服民の女と結婚し或は少くとも同居するから、其の結果として雜種人が生まれる。この雜種人の宗教は一般に母方の宗旨であるけれども、其のために必ずしも征服者たる父側の信仰や儀式などに反對するものではない。

が、二民族の交際を規定する必要に應じて出來た法律は、決して一時に無効とすべきものではないのであつて、絶えず新しい法律を制定する必要が起り、爰に初めて法律制定といふことが、一つの學問となるに至るのである。さうして新しい法律が出來て、習慣の代りに其れで人々の生活を取締まるようになると、是等の法律を解釋して、其のために起つた種々な争議を決する必要が現はれ、其のために又法廷も出來るようになる。

征服民の習慣と被征服民の習慣とは、互に衝突して互に相變形するものであつて、言語の如きも少からず變形され、藝術は相互模倣によりて發展し、且つ理想の如きも初めは互に衝突するが後には却つて合體するものである。其の他、生活の何れの方面に於ても、多少の影響を受けないものはないのであつて、復た征服民の酋長は王となり、彼れの臣下はそれらに大きな役目や地位や權力等を持つようになるものであるから、従つて是等の様々な特典が、彼等支配階級者の心に如何なる刺戟を與へたかは、蓋し想像するに難くないであらう。即ち今日見るやうな諸支配階級の様々な種類の如きも、實際は斯くの如き過程を経て現はれて來たものである。

七、社會の目的

A。以上のお説明は洵に興味深いものであると共に、且つ非常に有益なものでもあつて、從來此の方面の智識に殆ど全く空虚であつた吾々も、是れで漸く社會生活に關する狭いながらも、割合に徹底した觀念を持つことが可能なるようになったことは、偏に感謝に堪えない次第だ。で曩に後の方は省略しても宜しいと言ふた口前に對しても、此の上お願ひをするのは洵に心苦しい次第だが、折角の機會を此の儘で引つ込むのも洵に残念であるから、セ、メて社會の目的「或は理想」に關してなりと、モ少し吾々の蒙を啓いて貰ひたいと思ふ。おつか被せるやうではあるが、御承諾を待たないで、早速ながらお尋ねをする。一體、社會には目的なるものがあるものであらうか、先づ第一に其のことから承りたい。先刻、社會の目的に就いて話したいとお言葉であつたが、其の際自分は、個人には勿論目的があるけれども、社會には別に目的なるものあるべき筈はない。即ち個人個人が、己がじゝそれゝの目的を以て、互に協調してさへ行けば、其れ以上社會に目的などのあるのは却つてそれは蛇足ではあるまいかと、實は斯うも考へたのであるけれども、更

に考へ直して見ると、何だか社會に目的のあるやうにも思はれてならぬ。此の邊何分の御教示が願ひたい。

B。物には段落と云ふものがあるから、お願ひがなくても此の序で、社會の目的（若くは理想）については、是非に一言したいと思ふてゐた所だつた。が、奈何せん最初から本書には全體として紙數に一定の制限もあつたので、今は遺憾ながら機會を他日に期し、此の問題には一先づ斷念して思索を更に他の方面に向けてゐた所だから、餘り氣乗りはしないけれども、君の御熱心な好學心に對しても、少々は我慢をして御質問に應ずることにしよう。

社會に果して目的なるものがあるものなりや否やとのお尋ねであるが、是れは科學の領域を超越した實に哲學上の難問題であつて、或學者の全然之れを否定してゐるのに反し、他の學者は全然之れを肯定してゐる、而して此の兩極端説の間に、否定説ともつかず復た肯定説ともつかない半上落下的の様々な中間説があるのであるから、勿論一概に之れを斷定し去ることは可能ないが、吾々の生活に苟も何等かの目的若くは方向を意識する限り、従つて其れの殆んど全部を包括すべき社會に、何等かの目的がない筈はない。

個人には目的があるけれども、社會には別に目的なるもののあるべき筈はない、即ち個人個人が、己がじ、それ／＼の目的を以て、互に協調してさへ行けば、それ以上社會に目的のあるのは、却つて蛇足ではあるまいかと、お考へになつたこともあるらしいが、社會を以て人々の心的相互關係と見做す限り、一見その如うにも思はれないではないが、既に一種の關係として、人々の思想や感情や並に意志やを規定して統制する以上は、固より其れに價值標準たる何等かの目的が加はらなくては叶はぬ譯であつて、其の目的は最初は無意識のものであつても、人智を進みて社會の發達するに従ひ、其れは益々意識的に顯著となるものに相違ない。

世には睡生夢死の生活、即ち無自覺にして全く無目的のやうに見ゆる生活を、營んでゐるらしい人々も決して少くはないやうであるが、さう云ふ人々でも審かに觀察すれば、何等かの生活標準——よ縦しそれは非合理的な本能的のものであつても——は、持つてゐるものであつて、社會と雖も其の原始期に於ては、固より多く生物的若くは本能的の要素に支配されてゐるから、従つて其の目的の如きも、多くは意識されないでゐるけれども、最近心理學の闡明するやうに、本能を以て知能の本源と見做す限り、如何ほど幼稚な状態には在つても、兎に角、社會が或種の目的に

向つて進歩しつつあるものであることは、一點殆ど疑ひを容るべき餘地もない。

A。なるほど、如何なる種類の人々にも、何等かの目的はあるやうだ。例へば其の日暮しの浮浪人でも、何か知らん、空想にも均しい一種の目的を懐いてゐるからこそ、其の生存——勿論其の多くは非合理的なものではあるが——を持續しても行ける譯であつて、彼等にして若しも此の様な目的がなかつたならば、彼等の十中八九人は、恐らく一日も早く其の生活を閉ぢたであらう。

と云ふのは、彼等が不満足ながらも又苦しいながらも、其の生活を持續して行くのは、——況んやそれを満足なもの或は愉快なものと思ふてゐるならば尙更らることだが——其れを少くとも死よりは價值あるものと考へてゐるからであつて、既に自らの生活に何程かの價值を措いてゐる限り、従つて彼等に生活價值を鑑識し、或は少くとも味得する標準が、臆けながらも或は無意識ながらも、存しなければならぬのは、固より云ふまでもないことだからだ、所で此の様にきて來ると、個人の目的と社會の目的とは、全然別物のやうにも思はれてならぬが、御意見は如何？。

B。さう云ふ有様では、社會に關する君の思想も、未だ／＼未熟と云はなければならぬ。と云ふ

のは君は依然社會を自分の外にあるものと思ひ、従つて又社會の目的を全然自分の目的と對立させて考へてゐるらしいからであつて、それでは折角話を進めても、朦朧として遂に要領を得難いようになるから、少々冗長ではあるが、如何にして社會に目的なるものが發生するかから、左に説明しよう。

遺傳的にも其の多くは共通の血統を持つてゐる、且つ共通の環境に於て共通生活を營み、共通の經驗を持つてゐる人々は、程なく一種の社會的目的若くは理想——即ち共通的目的若くは理想——を持つようになるものであつて、特に親しい間柄の社會に發生する目的若くは理想は、全く人間性そのものの一部であるとさへ思はれるほどである。

クルレーも云つてゐるやうに、「社會の理想——それは恒久的な目的の謂である——は、之れを一般から觀れば、社會の諸成員の精神が融合し且つ彼等の一層高い能力が、其の充分な發現を見出ださうとする道德的全體、若くは共通感とも稱すべきものであつて、云はゞ其れは集團内の他の諸成員の思想や感情やを、想像することから發生するものであるから、多くの目的を達成するために、吾々は眞に理想を吾々の一部となし、且つ吾々の自我感情を其れと一體たらしめるものである。

である。

「小供とか未開人などは、必ずしもそう云ふ理想を意識してゐるものとは云へないが、それにも拘らず、兎に角其れを持つてはゐる、且つ體得はしてゐるものであつて、即ち彼等は自分達と其の仲間とを、縦へ違つてはゐるても、分つことの出来ない「吾々」であるとして體得し、さうして此の「吾々」を調和した運の好い仕合せなものたらしめたいのである。

「人が自らを家族の中に、或は少年時代の仲間の中に、如何に心から融け合はしめようと努めてゐるかは、蓋し何人も經驗する所であつて、吾々は此の同じ精神が、吾々の國家にも種族にも、若くは世界全體にも、擴がつて行くであらうと感ずるようになるものである。

復たジョセフ・リーの言としてクルレーの引證する所に依れば、特に「兒童は共通目的に痛切な關心を持つてゐるものであつて、苟も自らの關係してゐる遊戯團は、極めて深刻に彼れの意識の上に登り、さうして彼れの意識してゐる彼れの個性は、他の場合でよりは一層徹底的に、其の仲間といふ感じの中に融合するものである。」

以上は主として社會的理想若くは目的の、發生的方面の一部を説いたものに過ぎないが、以て

7 其の一般を知るに足るであらう。端的に云ふと、個人の目的は全く社會によつて作られる——此の場合でも、固より個性の獨自な發露はないではないが、それですら多くは社會的に、影響されたものであることを知らなければならぬ——ものであると共に、社會の目的は、復た個人に依つて作られるものであつて、即ち人々の目的の合致した焦點を離れて、社會に目的なるものがあり得よう道理はない如うに、又社會的思想若くは目的から否な其等の影響から全然超絶して、個人に理想とか目的などのあり得よう筈もない。

A。それで又漸く個人の目的と社會のそれとは、殆ど全く同一物であると云ふことが解るようになつた。が、爰にまだ少々不可解なやうな點がある。それと云ふのは外でもなく、若しも社會の目的と個人のそれとを、殆ど全く同じものだとすると、然うすると實際、個人々々の持つてゐる理想や目的やには、固より決して同一なものはないのみならず、剩へ同一人でも幾多の方面に、それと違つた目的を持つてゐる場合が少くはないとする限り、さう云ふ場合は、社會にも亦同様に多くの理想や目的やが、なければならぬ譯になる。所で、是れは事實と多少違つてゐることではあるまいか。

B。決して事實と違つてゐることはない。それを違つてゐるやうに考へるのが、君の淺見といふものだ。思ふても見給へ、從來人間社會の間に、一體如何なる理想、如何なる目的が、行はれたかと。其の中でも微力な理想や目的や、固より爰に掲げるさへ煩に堪えないが、其れの比較的顯著なものだけを列擧しても、尙ほ吾々は其の餘りに多様なるに、一驚を喫せずにはゐられないほどである。試みに其の一端を述べんに、社會の理想若くは目的は、全く個人生活の社會的方面の數だけ、それだけ數多く存するものであつて、其の上に、社會生活の一方面に對してすら、少くとも二つ若くは三つの相對立した理想若くは目的が、存在することは、現に經濟方面には資本主義あり、私有財産主義あり、共産主義あり、集産主義等あり、政治方面には急進主義あり、保守主義あり、進歩主義あり、専制主義あり、立憲主義あり、民本主義等あり、一般社會的方面には個人主義あり、社會主義あり、國家主義あり、國際主義等あり、復た人文方面には樂天主義あり、厭世主義あり、功利主義あり、實踐主義あり、主義あり、主我主義あり、主他主義あり、人道主義あり而して文化主義等あるのを以ても其の一斑を知り得るであらう。

以上は固より極めて其の概要だけを系統も立てないで、手當り次第に雜と列擧したものに過ぎ

ないが、此の外にも詳細に之れを類別し、而して細分した場合には、殆ど稿を更むるの迫ないほど數多くあるのであつて、其の中でも、最も多くの人々の精神を支配する理想若くは目的は、社會的に最も有力となるものである。

個人の目的若くは理想が、個人の要求に應じて生れる如うに、社會の目的若くは理想も、亦社會の要求に應じて發生することは、固より云ふまでもないことであつて、従つて個人の場合で、其の少年時代と、青年時代と、並に老年時代との理想若くは目的には、少くとも幾らかの變化がある如うに、上古と中世と、而して現代との社會的現想、若くは目的にも、亦多少の變化はなければならぬ譯である。けれども、實際に於て其の變化が個人のやうに甚しくないのは、要するに社會の目的若くは理想は、個人の其等の融合し且つ一致したものに外ならぬからだ。

A。質問が少々側^側に外れるかも知れぬけれども、一寸思案に餘つてゐるから訊くが、成程、社會に殆ど數限りないほどの理想若くは目的が、存在することはお説明によつて、漸く氣についた次第だ。所で、其の中でも様々な方面で、何時も吾々の眼を襲ひ且つ吾々の心を惱ますものは、「個人主義」と「社會主義」との確執である。個人主義の立場を聞けば、個人主義にも長所があり、

社會主義の論ずる所を見ると、社會主義にも亦棄て難い妙味があつて、其の方面に闇い吾々には、其の孰れが正しいのか悪いのか、或は少くとも其の孰れに一層多くの眞理が包含されてゐるのか、怎うも判断に苦むから、極めて簡單で宜しいから、是非とも一應のお説明が願ひたい。

是れには勿論幾多の専門書もあるやうであるけれども、吾々には其の一つ／＼を涉獵する閑もないし、縦しんば偶々餘暇を窃んで其の二三を手にした所で、長鞭馬腹に及ばないためか、それとも亦吾々の頭が悪いからか、どうも要領が得られなくて困る。

B。良い所にお氣がつかれて、當方で却つて感謝する次第だ。と云ふのは、此の事については折入つて一應説明しよう、實は前々から自分も考へてゐながら、つひ機會を見出せないで、今までも差控えてゐたからであつて、復た君も云はれてゐる通り、此の問題は其の影響する所が、殆んど總ての方面に行き互つてゐるほどに重大であるだけ、之れに關する著書も支那風の大袈裟に云ふと、眞に汗牛充棟も當ならぬ有様ではあるが、其れを専門家でない人々が、一々耽讀する譯にも行くまいし、縦しんば耽讀したにした所で、最新の社會學的原理に照し、兩主義の現代的機能の眞髓如何が、果して充分に味得され得るかどうかも、全くの所る疑問であるからである。

それで可能得る限り簡明に、兩主義の過程と並に其の社會的機能とを、純然たる社會學的の見地から——と云ふのは、此の問題は哲學的方面からも、倫理學的の方面からも、或は復た其の他の様々な方面からも、取扱ふことの可能る極めて範圍の廣汎な題目であるから——解説して見たいと思ふ。

概して云ふと、兩主義は共に社會の要求に應じて生まれたものであるから、本來から云へば、孰れを善いとか悪いとか、復た孰れの方に多くの長所があるとか短所があるなどと、評することは固より不可能なものであつて、社會生活の原理として、之れを適當に玩味し攝取すれば、共に俱に結構なものに違ひないけれども、それかと云ふて其の孰れでも、餘りに過當な價值を以て迎えられる時は、却つて社會に害毒を流すようになるものである。

が、兩主義を受け納れることの當不當を決するには、果して如何なる標準を以つてすべきであるかと云ふに、其れは全く、其の時の社會的事情如何に由るものであつて、總約して云へば、社會の統制が頗る峻嚴で、其の諸成員たる個人は、其のために壓服されて、殆ど其の個性を伸張するの機會なく、却つて社會の進歩も、爲めに沮止されようとする時代、例へば西洋では教權全盛

の中世紀とか、我國では武斷專制の封建時代とかの後には、必ず個人主義が高唱され、之れに反し社會的傳統とか威壓とか、弛緩して、個人が自由放縱に流れ、従つて生物學的の意味での生存競争が、露骨となると共に、社會連帶の紀綱が、漸く頽廢さるるようになる場合は、又必ず社會主義が力説さるるものである。が、孰れの場合に於ても、兩主義は云はゞ疾病に對する醫藥の如うに、孰れも社會的病弊の缺陷に投じて、所期の効果を挙げようとするものに外ならないから、社會の總ゆる時期に、其等の不變的にして且つ一樣な價值を認めることは、到底可能べくもない。左に少しく其の發達過程を観察せんに、古い事柄は姑く之れを差置くとして、近代の個人主義的學説は、モリス・ヒルクイットなども云つてゐるやうに、蓋し封建的國家と教會との過度な中心統一に、對する反動として起つたものであつて、復た見様によつては、人民一般の間に、日に月に益々發達しようとしてゐた産業階級に對し、王侯や貴族や並に僧侶やが、矢鱈に權力を振つたことの反抗として、起つたものとも見做されないではない。

で、個人^{△△△}の自由^{△△△}てふ標語は、云はゞ新進氣鋭のブルジョア（中産商工階級）が、過去の沈滯した傳統的權力に對する政治的抗爭の舞臺に、出陣しようとした際の、いさよのこえ鬨とも云へるのであつて、

即ち此の鬨聲は競争の自由若くは産業上の自由を、意味するものであると同時に、又製造業並に商業の進歩のために、國家の諸能力を可能得る限り、最も善く利用する權利、即ち政治上の自由と、人民の政治的並に産業的經營に對し、教會の干渉や掣肘やを蒙らないようにすること、即ち宗教上の自由とを意味し、特に經濟上では、私有財産の自由と不可侵權とを、主張するものであつた。

斯う云ふ意味で、個人^{△△△△}の自由は全くブルジョア階級が、封建社會に對する反抗の殆ど總ゆる方面に現はれてゐるのであつて、彼の有名なルウソウの「民約論」とか、並にデイドロウやグラムベル等の社會哲學にも、此の様な思想は同様に根柢をなしてゐる、復たアダム・スミスや其他初期の英國理財學者等の要求した無干渉主義も、ボルテールを初め爾餘の佛國合理的批判派の主張も均しく此の思想を鼓吹するものに外ならなかつたのである。

更に北米獨立宣言の一句たる「凡て人は自由に生まれて自由に存續し、他人に侵されない自由の權利は、萬人の等しく神から授かつた所だ」と云ふ意味の思想の如きも、之れは要するに久しい間、重苦しい沈滞した社會的傳統の羈絆から、自らの個性を解放しようとする自然の發聲に外

ならぬのであつて、概して個性解放の喚叫たる個人主義の強調さるる時代の社會人は、恰も生命なき機械の如く人形芝居の人形の如く、活動はするけれども其の活動たるや、單に他の原動力の使命に制せられて、或は西し或は東するのみに過ぎないから、其所には決して自主的の行動や適應作用のあり得よう道理はなく、従つて些の變化些の機軸をも、發揮することの可能ないのは、固より云ふまでもないことであらう。

斯くの如き状態は、確に社會の進運を促す所以のものではないのであつて、社會的結束が緊張することは、固より望ましいことには違ひないけれども、社會的體制が硬化して、融通性と可變性を失ふようになるのは、之れやがて社會の頹廢を誘起するものでなければならぬから、斯う云ふ場合には、個性の解放を標榜して、其れに自由な立場と、發展の充分な餘地とを、與へようとする個人主義の主張は、社會の進歩といふ點から觀て、非常に價値あるものでなければならぬ。が、然るに物は窮まれば必ず弊が生ずる例の通り、如何ほどに社會進歩に缺ぐべからざる要因であるとは云ふても、其れを極端まで推し擴めて行つて、マクス・スチルナーの云つてゐるやうに、「余にとりては、吾なるものより意義多いものはない、……故に自分のことではなければ、全

く關係せぬが可い。諸君は善い事は少くとも捨て、置けないことだと、考へてゐるらしいが、一體何が善くて何が悪いことなのか」と云つたやうな工合に、個人主義の高潮した結果は、極端な利己主義若くは自己中心主義が行はれ、さうして道德的將た政治的に、無教權的若くは無政府的狀態が、社會を風靡するようになるのも、之れ亦決して多數の人々の希求する理想境でないことは、固より云ふまでもない。

人々を刺戟して幾多の發明品を完成せしめ、斯くて産業革命の端緒を開いたものも、個人主義の賜物なら、復た其の結果として、一方には賃銀生活者の數を激増せしむると同時に、他方には前代未聞の成金富豪を輩出せしめて、貧富の懸隔を日に益々酷しくならしめたのも全く其の賜物である。而して又一方には晝夜汗水たらして働いても、尙ほ且つ満足な生活を營むことが、可能ないで、果ては富豪を咀ひ制度を咀ひ、社會を咀ひ、且つ天を咀ふて、一時も早く、階級戰爭の齎らす社會改革の來らんことを、渴者の水を求むる如く待ち焦れてゐるらしい無數の窮民があるかと思へば、他方には其れを恰も空吹く風や夏間の夕立の如う、手軽く解釋して、金力で天でも地でも人間でも、悉く自分の意の儘になるものでも、考へてゐるらしいカール・ライルの所謂無感

覺な豚のやうな金満家があつて、互に怨恨と侮蔑とを以て乖離の溝を日にく深からしめ、神經過敏な一部の社會先覺者をして、今にも由々しい世界的の社會擾亂——それは平面的でなくして却つて立體的の階級闘争——が、勃發しはしないかと心痛せしめてゐるのも、等しく個人主義の餘弊に外ならぬ。

個人主義の斯う云ふ成行を見て、其の缺陷を矯正しようとして現はれたのが、即ち社會主義である。前では單に個人主義の一般的方面のみを述べたが、嚴密に云ふと、個人主義にも幾多の内容がある如うに、社會主義にも様々な流派があるから、一概に論じ去る譯には行かない。けれども社會の一層一般的な理論に適用して、此の兩主義は互に相對立してゐる如うに、特に産業組織の方法に關しては尙更ら左様であつて、ベンザミン・キツドも云ふてゐるやうに、眞の社會主義は、社會の初めから、否な生活の發端から、賭されてゐる個人間の生存競争を、結局中絶せしめることを其の目標とするものであるから、其れは直接將た間接に、個人主義の必然な歸終たる産業主義を以て、其の不俱戴天の宿敵とするものであることは、現代社會主義の始祖と稱されてゐるカール・マルクスが、此の事を夙に言明してゐるのを以ても知らるるであらう。

私は爰で、社會主義に關する管々しい評論を、なすことは差控えるが、之れを要するに、現代に於て社會主義の主張が、特に力強く響いてゐるのは、現代が特に其れを最も多く要求してゐるからに外ならぬ。

過去數年間に亘りて、世界の人心を聳動せしめた歐洲大戰も、一部の人々には從來の資本主義に對する、最後の吊合戦であるまで考へられてゐて、其の結果、露國には是れも前代未聞である「勞農政府」てうものが崛起し、さらでだに、惑亂せる天下の人心をして、一層激動せしめたほどであるが、其れも今日の旗色では果して最終の美果を收め得るか怎うか、一向雲行きは知れぬのみならず、一部の人々の夢想した資本主義の葬合戦とやらも、只今の所ろでは、どうやら形勢が、怪しくなりそうで、一面より觀れば資本主義の別働隊たる國際間の經濟戰爭は、今後尙ほ一層惡辣且つ陰險を極むるようになるのではあるまいかと云ふ豫兆さへ、ほの見えるに於ては、昨今多く彬出する社會改造家達の改造々々も、然うお安くは問屋で卸しそうにも思へないのである。

是れと云ふのも、現代多くの社會改造家達は、社會の改造を單なる紙上のロジックとしてのみ

論究し、さうして改造と改造されようとする社會の實狀如何の關係、詳しく云ふと、其の社會を組成してゐる人々の精神的準備如何、更に端的に云へば、人々の社會的習性如何等を、毫も顧慮しないらしいからであつて、阿弗利加の蠻民を最高の文明社會に拉して來て、直に其れを同化せしめようとしても、其れは到底駄目であるのみならず、却つて其の蠻人の心身に、少くとも一種の病的な變調を、來たさしむるが、常である如うに、復た小學校を卒へたばかりの兒童に、直に大學校の専門學を教へても、其れも彼れの心身を害ふに終るに過ぎない如うに、多くの場合云はゞ尙ほ未だ殆ど全く社會生活や共同生活やの、訓練も情操も徳義も、將た固より習性への準備さへも、出來上がつてゐない現今の、主義的で狡猾貪慾な、且つ多くは道義心の足りない社會人に對し、如何ほどに紙上だけの完全な社會改造案を提供しても、固より所期の目的の到達せらるべき筈はないばかりか、却つて其のために、從來よりも更に劣等な社會的環境を、招徠するやも測られぬのである。

此の點に於て予は既に言及したやうに、社會改造の心理學説を支持するものであつて、縱へ理論上では如何ほどに善美な改造案でも、之れに實行上の可能性を賦與するものは、云ふまでもな

く改造されようとする社會の實狀、即ち人々の精神的準備其のものに外ならないから、少くとも社會改造案に關して云へば、其れは恰も植物の苗と苗床との關係の如く、復た前にも引證した醫藥と病人との關係の如く、二者の密接な關係を閑却して、其所に美事な苗のあり得よう筈もなければ、結構な醫藥のあり得る氣遣ひもなく、又固より賞讃すべき社會改造案の存立すべき道理もない。

然るに従來案出された社會改造案なるものを見るに、其の殆ど悉くは、當の社會的事情乃至民族性等は省察しないで、唯だ單に案そのものの理論的妥當性と嶄新性のみに、心を奪はれてゐるものやうであるけれども、其れでは恰も患者の症狀を無視して、單に調劑のみに腐心する庸醫のやうに、結局失敗に終るのは固より當然のことであつて、斯くてロバート・オーウエンの計畫が、不成功に終つたのも、カーベールやサン・シモンや而してフリーリエやの案が、多くは空想として終つたのも、畢意之れがためだ。即ち彼等は案の論理的美觀のみに心酔して、之れを適用すべき社會や、民族やの、心性そのものは毫も考慮に入れなかつたから失敗したのだ。此の點から云ふと、上調子の我國青年間に、一時非常な人氣を博したバートランド・ラッセルの社會改造論な

ども、現實の改造案としては、全く探るに足らぬ紙上の論理的遊戯——それも多くは最新の社會心理學的原理と根據とを無視した——であり、復た現に露西亞に於て、大芝居を打つてゐるレーニンやトロツキーやの計畫なども、今後更に幾多の變形か或は高價な試煉かを經過しない限り、恐らく失敗に終るであらうことは、予の斷言して憚らぬ所である。

現に彼等の最初の計畫は、少からず失敗した跡を示してゐるではないか。それは固より然うあるべきことであつて、若しも人間性の發達過程を、無視する計畫にして成就すとせんか、其の時こそは、人間性の悉くが、神性に化して、奇蹟が自在に行はるる時でなければならぬが、實際を云ふと、奇蹟ですらも人間性の法則に依らなければ、決して行はれるものではないのである。

A。個人主義若くは社會主義について、復た昨今非常な勢で、世間に喧傳されてゐる社會改造論なるものに就いて、全く痒い所に手の届くやうな、剴切にして且つ徹底的なお説明を承つて、之れで別に思ひ残すことはない。其れにまた時間上の御都合もあらうと思うから、名残り惜しいながらも、是れで一段落をつけて、一先づお別れをしたいが、其の前に、モ一つだけ、是非に御教示を仰ぎたいことがある。それと云ふのも外ではない、既に社會に幾多の目的があるとしても、其

の中でも何か知ら、最も重大な且つ何人にも共通した究極目的とでも云ふやうなものがあるらしく吾々には思はれてならぬが、さう云ふやうなものは別なものか。

B。それは確にある。が然し、是れに關しても様々な異説があつて、必ずしも歸一する所はない。で、仕方がないから其の一つ々々を、概略ながらも左に論述する外はなからう。

從來一部の人々特に經濟學者の多くによりて、主張された社會の究極目的なるものは、社會の安寧を増進すると云ふことにあつたやうだが、若しも吾々が社會の安寧と云ふことに關して、満足し得る程度の適當な定義を下すことが可能さへすれば、之れでも萬更ら差支へはない。

社會の安寧を以て、社會の諸機能を最も有効に働かせ、且つ其の諸成員を協調的に發達させることから、若しも發生するものであるとすれば、然らば其の際は、社會の安寧なるものは、必ずしも最大量の富や理智的發達や、最も進歩した宗教思想や、最高の藝術的教養や、若くは最大な道德力等を意味するものとは限らぬやうであるが、然し或程度までは是等のものの悉くが、其の觀念中に包含されてゐることは、固より云ふまでもなからう。

けれども社會の目的を以て、最多數の人々の最大利福であると見做すと、其の最大利福とは一

體どんなもの、復た最大多數人とは一體どう云ふ種類の人々を指すのであるかと云ふことを明示しない限り、吾々は容易に此の説を受け入れることは可能ない。

社會は絶えず新しい人々を補充することに由り、初めて持續するものであるから、勿論、此の最多數人と云ふ中には、現在人と同様に今後生れようとする人々も、包括されてゐるものに相違なく、復た最大利福と云ふ言葉の中にも、單に物質的の富や安寧や幸福やばかりでなく、更に一般の文化的發達とか並に有用な設備の完成等も、含意せられてゐるものに違ひないが、所で是等のものを、一つ々々取り離して觀察すれば、何れも社會に最大利福を保證し得るものとは思はれないのである。

さうして、最多數人の最大利福と云つても、或時は主として、經濟上の機會の擴大によりて得らるることもあれば、復た或時は政治上の安全により、更に或時は文化の發達によりて達成せらるることもあるから、然う云ふ場合——例へば戰時の如き——此の原理に従へば、個人の自由は集團の利益のために、少からず拘束されようとする傾きないでもない。が、其他の場合では、個人は割合に多く自らの個性を、發現することが可能であらう。で、理想的の社會に於ては、最

大利福なる語は、凡て是等の事柄を包含してゐるものでなければならぬ。

更に一つの説は、幸福といふことと功利といふことを同一視して、詰まり功利を増進するのが、道徳行爲の目的であると思ふものであつて、是れは夙に希臘時代の道徳學者によりて唱道せられたが、爾來此の説は、様々な支持者により、様々な社會的事情の下で、様々な見地から主張された爲め、幾多の變化を受けるのを免れなかつた。

先づ第一は單なる個人的見地から、功利を考究することであつたけれども、其の後になつて、社會的の功利をも、包括するものでなければならぬといふやうに擴大され、更に近世に到つて社會の進歩といふ事を標準として、之れを解釋しなければならぬと思ふやうになつた。が、完全なる社會といふものは苟も個人の活動から離れては、これを考察することが可能ないから、偕て然らば個人の幸福を増進せしめ、且つ彼れに一層自由な活動的の奉仕を爲さしめない功利なるものに、果して如何なる價值があるであらうか。して見れば、功利説には個人的方面と社會的方面とが、共に包括されてゐるものと見做さなければならぬ譯である。

が、予の既に前でも暗示したやうに、社會は決して全然固定し石化したものでなく、且つ其

の生長は決して完成さるる時期はないものであるから、従つて吾々が時々刻々に、適應しつつある社會生活、若くは構造——構造とは云ふものの、實は全く一つの作用若くは體系プロセスに外ならぬのである——に、一定不變の理想とか或は目的など稱するもののあるべき筈はない。若しもあるとすれば、其れは單に一個の概念に過ぎないのであつて、其の内容は何時も變化しつつあるものであることを知らなければならぬ。

言葉を換へて云ふと、人々が手近かにある諸々の勢力を利用する限り、社會は絶えず自らを再生するものであるから、社會の眞の究極目的は、詮する所ろ正當に進歩しようとの一事に外ならない。で、若しも諸々の社會的勢力に均衡なるものがありとすれば、復た社會が其の總ての諸部分に於て、均等さるることがありとすれば、更に又社會の諸機關が、各々の個人に最大なる自由と並に最大なる機會とを、與へ得るやう完全に發達し且つ完全に分化するとすれば、端的に云ふと、全體が一層調和的に事物を處理するやうに、着々と進行するとすれば、然らば其の場合、社會は進歩的であると評するの外はないのであつて、此の様な正當の進歩こそは、眞に吾々の何人も希望し、若くは慾求する所のものを確保するものに相違ない。

と云ふのは、吾々にして最初から完成された社會を持つたとする限り、其所には生長のあるべき筈はなく、生長のないものは、詰まり衰亡あるの外はないからであつて、時とすると社會の諸成員の側から云ふて、何等の努力もしないで、社會が自らを維持し得るやうな階段にでも、到達したかの如うに行動する人々もないではないが、縦へさう云ふ場合があつたとしても、社會が終始嚴密に確定された規則に従ふて活動し續け得るやうな仕方としては、決して發見さるるものではないのである。

一見した所では、勿論多少恒久的のやうに見える幾多の勢力もないではないが、それですら、尙ほ是等の勢力を變換するために、且つ法律や政治や道德や宗教や並に生活やに、新しい標準を與へるために、更に又是等の様々な標準とか理想などに、社會を絶えず適應せしむるために、人々は何時も準備をしてるなければならぬものであつて、是等の勢力の中で、一番力強いものは、何と云つても、社會發展の流れを、一生涯の中で全然新しい溝へ變化し得るやうな、獨創性を持つた個人そのものでなければならぬ。さうして社會が自らを實現し始めて、自らの慾望や目的やを満たすことを意識するやうになると、其れは既に社會生活の一層高い發達階段まで、進んで

あるものと云へるのである。

前でも云ふた通り社會の目的は、社會が發達するに従ふて變化するものであつて、其の初めは原始人の本能的感情から、詳しくは、團體あつたがために自らの個人的生存を、完うすることが可能たと云ふ彼れの意識的知覺から發生し、即ち、他の敵對的幾多集團に對抗して、生存を完うすると云ふことが、社會の最初の目的であつたに違ひない。

而して此の様な目的は、今日ですらも尙ほ依然として有力なものであるから、一切の社會の直接目的は、云ふまでもなく、自らの生存を完うすると云ふことであつて、従つて一つの組織體としての自らの生存を完うしようとする社會の使命が、職として社會の意義を其の諸成員が自覺する程度如何、詳しく云ふと、社會の持續が如何ほどに彼等の安寧を保證してゐるかを、彼等が會得する程度如何に由るのも、固より當然のことと云はなければならぬ。

が、社會の諸成員の此の様な感情は、又家庭の愛とか、慣れた制度とか慣習とか理想などに、起原を有する其他の多くの諸要因によりても、大に勢づけらるるものであるから、是等を用意周到に哺育することは、社會にとつて極めて大切なことであつて、復た自らの生存を完うするため

に。社會の用意すべき第一の要件は、其の諸成員をして自由に、それらの生活様式や慣習や理想やを享樂せしむると共に、且つ彼等の民族的並に個人的の諸理想を、實現せしむるよう助勢することではなければならぬから、一層嚴密な機能的の見地よりすれば、社會の目的は其の成員たる諸個人をして、それらに可能得る限りの、充分な自我表現をなさしむるよう、更に言葉を換へて云ふと、彼等をして其の社會的環境に、可能得る限り完全に適應せしむるよう、確保する所以の、客觀的社會諸條件を、完備することにあるとも云へるであらう。

而して是等の諸條件を完成することを以て、ギツデングス博士は社會の直接目的と云つてゐるが其中には勿論政治組織によりて、生命と財産とを安全にすることも含まつて居れば、復た各々の成員に平等な政治的權利と、法律の前での公平な裁判と、平等な經濟的機會と、並に一樣な文化的利益とを、保證する施設も含まつてゐるに違ひない。けれども、是等の客觀的な社會條件を保證することは、固より必ずしも社會の究極目的ではないのであつて、社會の究極目的は之れを一言以つて蔽へば曰く、^{△△△△△△△△△△}社會的人格の創造之れである。

斯くて社會的人格を創造することにより、社會は單なる進化を變じて進歩——進歩とはホツフ

ハウスに従へば、人間が合理的に價値を附し得るやうな社會生活の諸特性を發達させることだから——たらしめるものであつて、「進化は^{インテグレーション}統合と^{ディフェンション}分化とであり、又^{コネクション}相互關係と^{コンディネーション}相互配列とであるから、必ずしも意識的生存の改善を意味しないけれども、統合された一體若くは集團の各單位が、手段であると同時に目的ともなる場合に、進化はやがて進歩となるものである」とギツデングスは言ふてゐるが、此の様な社會的人格は、諸個人をして完全に、客觀的の生存條件に適合せしむると共に、復た彼等をして各自の自我實現を保證せしむるよう、社會構造を形造らうとして、他と協力せしむるものである。

これ實に臚けながらも、由來殆ど總ゆる聖者哲人によりて、一樣に渴仰され憧憬された所の社會的境遇であつて、按ふに獨逸の詩聖ゲーテをして、

„In Ganzen, Guten, Schoenen

Resolut zu leben.“

「全きと善と美とに、

生きようと決心」

社會の目的

せしめたのも此の境地なら、復た英國の欽定詩宗テニスンをして、

“Ah ! when shall all men's good

Be each man's rule, and universal Peace

Lie like a shaft of light across the land,”

.....

「あゝ總ての人の利福が、各々の人の規定とならん時、初めて世界の平和は地に射す光の箭の如くに現はれよう。」

.....

と歌はしめたのも、同様に此の様な理想境を指したものであらう。が、其の實現は勿論人々の覺悟如何で可能でもあれば復た不可能でもある。.....此の外にも、述べたいことは山程あるが、以上で既に最後の豫定餘白も超過したから、「社會の話」は是れで打切ることにする。

(終り)

参考書目

一、日本文で一般に社會を論じてゐる主要著書。(順不同)

一、岸本能武太著「社會學。」

一、建部遜吾著「普通社會學。」

一、同 「社會靜學。」

一、同 「社會動學。」

一、遠藤隆吉著「最近社會學。」

一、浮田和民著「社會學講義。」

一、納武津著「最新社會學講話。」

一、高田保馬著「社會學原理。」

一、樋口秀雄著「社會學十講。」

(其他にも翻譯や講義録等があります。)

一、英文で一般的に社會を論じた主要著書。

- 1, Blackmar, F.——Elements of Sociology.
- 1, Blackmar & Gillin,——Outlines of Sociology.
- 1, Davis, M. M.——Psychological Interpretation of Society.
- 1, Dealey, I. G.——Sociology.
- 1, Ellwood, C. A.——Society in its Psychological Aspects.
- 1, Findlay, I. I.——An Introduction to Sociology.
- 1, Giddings, E. H.——Elements of Sociology.
- 1, "——Principles of Sociology.
- 1, "——Inductive Sociology.
- 1, "——Readings in Descriptive & historical Sociology.
- 1, Kelsey, C.——Physical Basis of Society.
- 1, Mackenzie, I. S.——Introduction to Social Philosophy.
- 1, "——Outlines of Social Philosophy

- 1, Ross, E. A.——Principles of Sociology.
- 1, Stuckenberg, I. H. W.——Sociology.
- 1, Small, A. W.——General Sociology.
- 1, Ward, L.F.——Outlines of Sociology.
- 1, "——Pure Sociology.

三、佛文で一般的に社會を論じた主要なもの。

- 1, Auguste Comte——"La Sociologie," résumé par E. Rigolage.
- 1, Bouglé, C.——Qu' est-ce que la Sociologie. ?
- 1, Cornejo, M. H.——Sociologie générale.
- 1, De Greef, G.——Introduction à la Sociologie.
- 1, D. Roberty——La Sociologie.
- 1, Letourneau, C.——La Sociologie.

I. Waxweiler, E.——Esquisse d'une Sociologie.

四、獨文で一般的に社會を論究したもの。

1. Achelis, Th.——Soziologie.

1. Gumplowicz, L.——Grundriss der Soziologie.

1. Ratzenhofer, G.——Soziologie.

1. Simmel, G.——Soziologie.

I. Schäffle, A.——Abriss der Soziologie.



◇圖書總目錄—御入用の節は—

往復ハガキにて御申込次第送呈いたします◇

大正十一年六月十五日 印刷
大正十一年六月二十日 發行

〔定價金壹圓貳拾錢〕

社會の話
附 奥

發賣所

編纂者

平 栗 要 三

發行者

茅 原 茂

印刷者

東京市小石川區柳町二十六
古 田 市 郎 平

發行所

東京市本郷區弓町一ノ二五
世界思潮研究會

東京市本郷區弓町一ノ二五

日本評論社出版部

振替東京九六七八番
電話小石川(一)九七一番
電話小石川(三)六九五番

吾等何を學ぶべき乎

第一期刊行目次・毎月一回刊行

(1) 文學士 淺野利三郎著 宇宙の話 既刊	(2) 文學士 淺野利三郎著 文化の話 既刊	(3) 納武津著 社會の話 既刊	(4) 松本悟期著 哲學の話 既刊	(5) 理學士 大久保親彦著 進化の話 (生物篇) 八月刊	(6) 理學士 大久保親彦著 進化の話 (人類篇) 九月刊
(7) 理學士 大久保親彦著 遺傳の話 十月刊	(8) 法學士 早坂二郎著 經濟の話 十一月刊	(9) 文學士 淺野利三郎著 心理の話 十二月刊	(10) 安島健著 宗教の話 一月刊	(11) マスター・オブ・アーツ 弓家七郎著 科學の話 二月刊	(12) 文學士 淺野利三郎著 地理の話 三月刊

全卷十二冊の詳細なる内容見本御入用の節は二錢切手封入御申込下さい!

◆各冊各料送・均錢十二圓一金冊各價定◆

505
35

終